

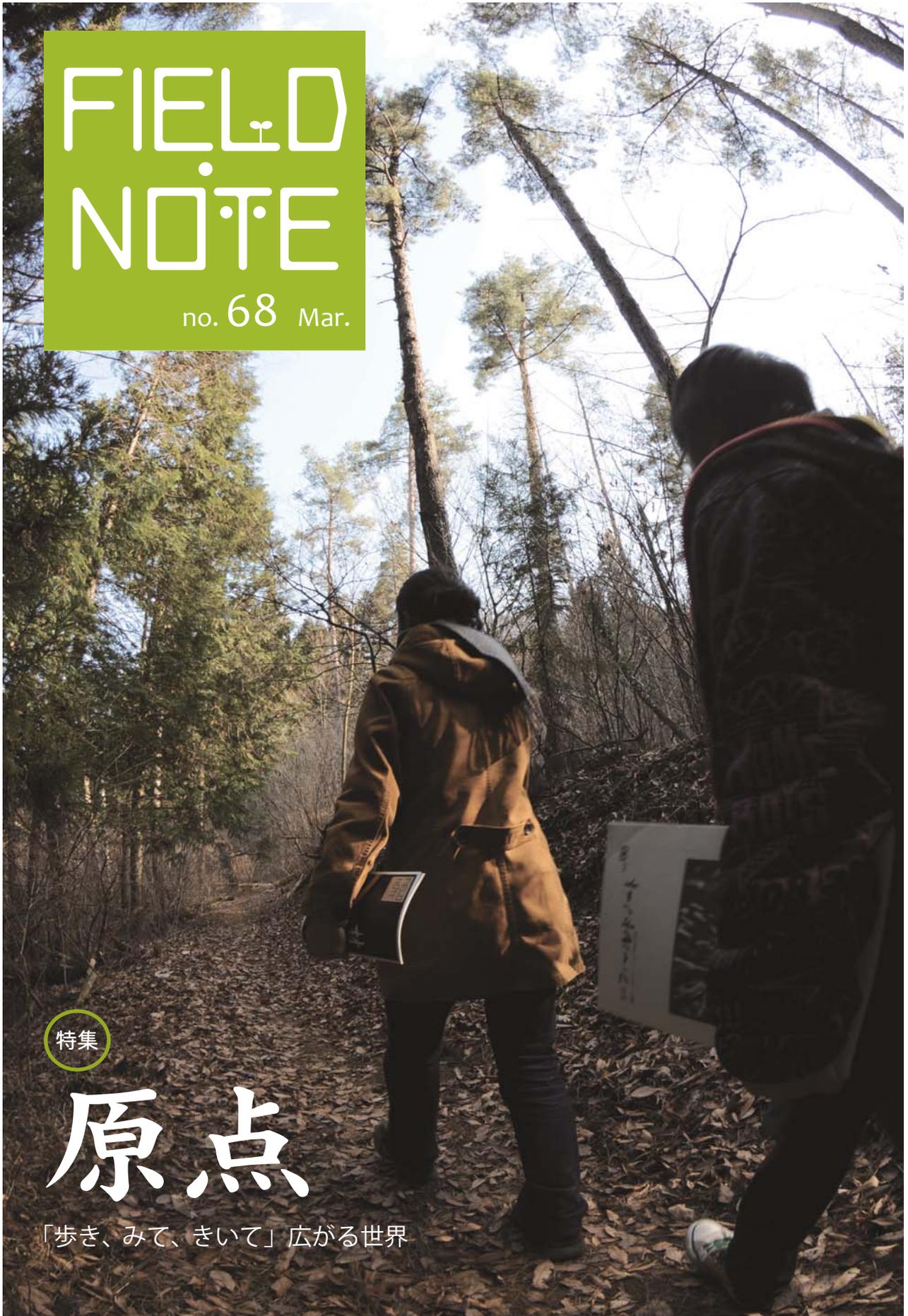
FIELD NOTE

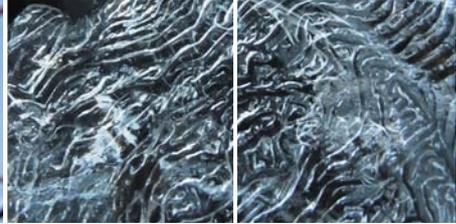
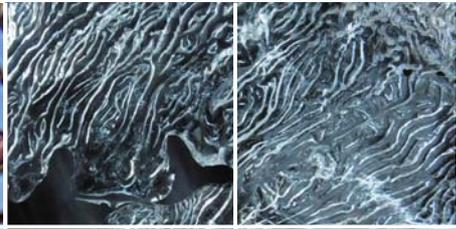
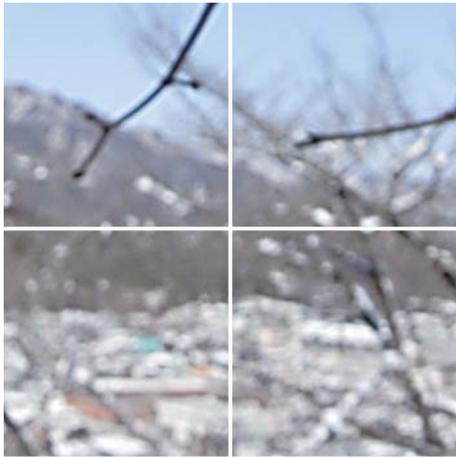
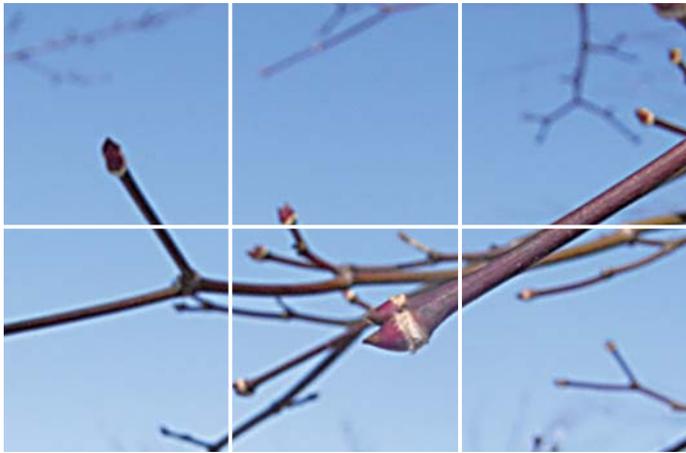
no. 68 Mar.

特集

原点

「歩き、みて、きいて」広がる世界





もうすぐ、春が来る

Contents



原点

「歩き、みて、きいて」広がる世界

自然から学ぶ

- 06 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第12回
フィールドを持つこと
アカネズミが教えてくれたこと
- 16 アート・ギャラリー
ナキゴエ
- 18 森歩きの野帳から 第3回
リスとの出会い
- 20 ムササビをとおして見えた世界
- 22 センサーカメラが捉えた動物たち



『フィールド・ノート』では、「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

人に学ぶ

- 10 地域に息づく
暮らしの広がり
- 14 写真を持って街を歩く
- 24 木に関わる人に会いに行く
- 28 山を観る人
炭から山を観る
- 30 農ごよみ
- 32 織物と生きる
- 34 生け花のころ
- 36 記憶
- 38 ネコがいるバス
- 40 先生を訪ねる 第2回
自然塾の番長
- 43 おわりに、そしてこれから
- 44 Field Note News

特集

原点

「歩き、みて、きいて」 広がる世界

自分の足で歩き、自分の目でみて、

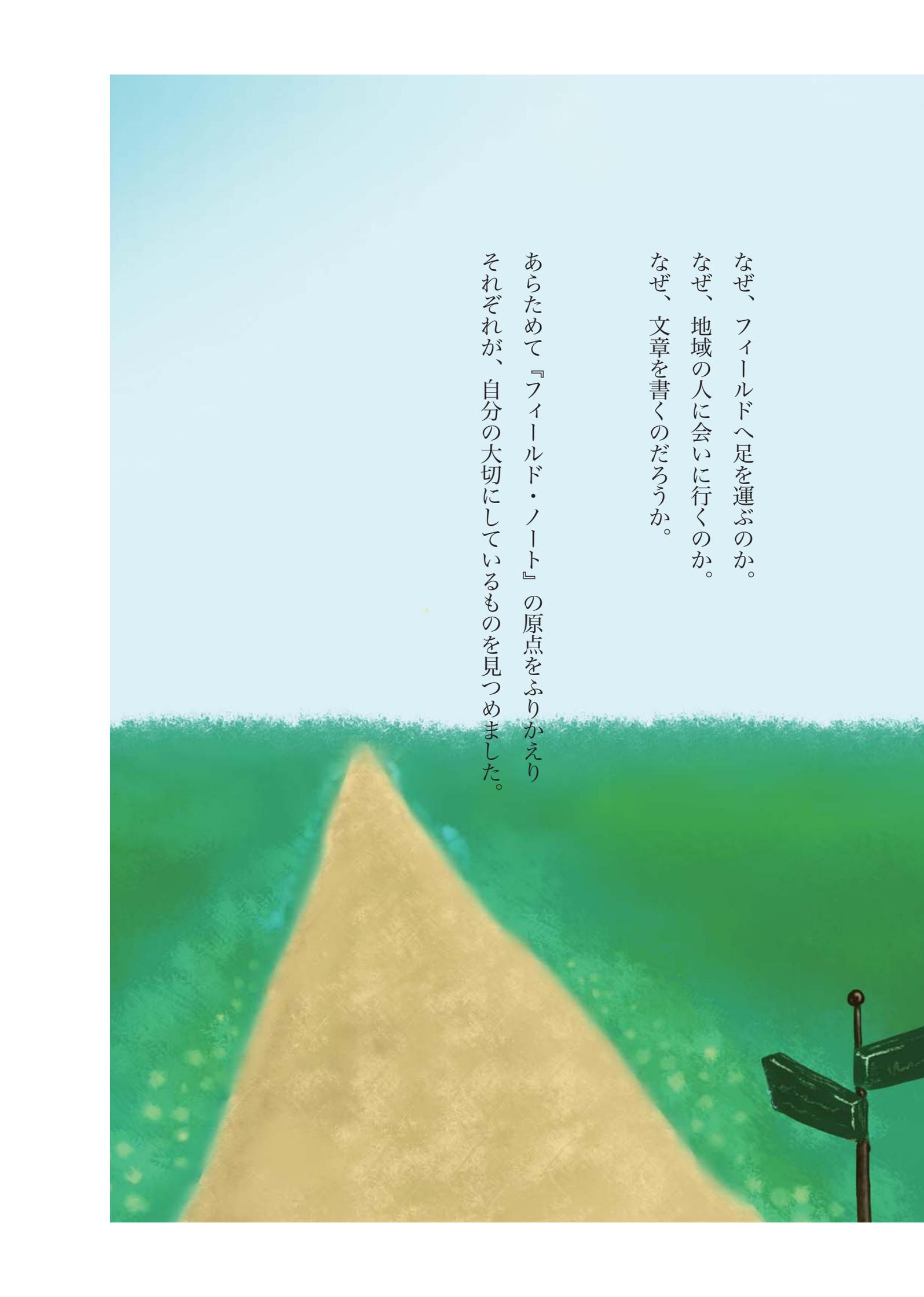
人の声に耳をかたむけ、感じ、考える。

このことを大切にしながら、

わたしたちは『フィールド・ノート』をつくつてきました。

これがわたしたちの原点です。

いま、わたしたちはどのような思いで『フィールド・ノート』に
向き合っているのでしょうか。



なぜ、フィールドへ足を運ぶのか。
なぜ、地域の人に会いに行くのか。
なぜ、文章を書くのだろうか。

あらためて『フィールド・ノート』の原点をふりかえり
それぞれが、自分の大切にしているものを見つめました。

第12回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

フィールドを持つこと

●文・写真 西教生（河口湖フィールドセンター 自然共生研究室）





初夏、観察小屋の裏山は、このような新緑に彩られる



フィールドを流れる川。カワガラスやセキレイ類が見られる

山

梨県に来て、今年の4月で10年になりました。都留市で鳥を見るようになったのは、2001年7月からです。場所は都留市十日市場の中屋敷フィールド。中屋敷フィールドで見た鳥を記録している野帳を開くと、2001年7月21日から始まっていて、「キセキレイ、ハシボソガラス、トビ、ヒヨドリ、イワツバメ」の5種が記されていました。

都留市の鳥に関わるようになった最初の場所が中屋敷フィールドでしたので、その後、全国のいろいろな場所で鳥を見てきていますが、いつも「中屋敷フィールド」を基準に考えてきました。ですから、どこに行っても中屋敷フィールドと比較してしまいます。それは、自分の住んでいる場所の周辺に生息する鳥が一番興味があるからです。

さて、中屋敷フィールドで出会った最初の鳥はキセキレイでした（右写真）。僕にとってキセキレイは、小さいころから見慣れている鳥のひとつです。キセキレイに対して特別な想いはありませんが、それを見た中屋敷フィールドが自分にとっての原点だと思います。最初に出会った鳥は、その場所を知るときにつかえませんが、中屋敷フィールドを知る



ための大切な生きものであることには変わりません。キセキレイのいた川、その上空を飛ぶイワツバメやトビ、スギの木から聞こえるヒヨドリの声。そこにいる鳥を通して、中屋敷フィールドのさまざまな顔を見てきました。見たものから、いろんな関心が生まれてきます。約10年のあいだに中屋敷フィールドの植生は大きく変わりました。少なかったササ類が増え、ススキの草原はかなり減りました。オニグルミやクワはずいぶん大きくなり、イノシシの掘り跡でホオジロ類が採食している場面を見たときは、異種間の関係に惹かれました。イノシシが土を掘った場所が、ホオジロ類の好む採食地を生み出していたからです。

フィールドは、定期的に足を運ぶ場所です。自分のフィールドを持つことで見えてくるもの。僕の場合、中屋敷フィールドとほかの地域を比較しながら、共通することや違うところに注目してきました。フィールドを持ち、それを介して世界を見てきたと言えるでしょう。それは、自分の関心と向き合うことでもありました。

A small brown mouse is perched on a mossy log. The log is covered in green moss and has several large, clear water droplets hanging from it. The background is dark, making the mouse and the log stand out. The mouse is looking to the left.

フィールド・ミュージアムのたのしみ

アカネズミが教えてくれたこと

●文・写真 北垣憲二（本誌発行人）



クルミを運ぶアカネズミ

自然との接触は 直接であるほどよい

ア

カネズミ。私が大学に入学して最初に出会った野生動物です。たとえ一瞬の出会いであつても、野生動物の活気に満ちたさまは強烈な印象として心に刻まれるようです。じつさい子どものころ、山道で偶然、ノウサギに出会ったときの感動は今でも鮮明に覚えています。

大学1年の夏休み、下宿の裏山を歩いていると丸い穴のあいたクルミを見つけました。石垣の隙間に同じように穴のあいたクルミがいくつもありました。動物の図鑑でこれがアカネズミの食べた痕だということを知っていましたが、実物を見たのは初めてでした。クルミの食べ痕をじっくりと観察してみると、小さな歯の痕がいくつも刻まれていました。小さな野ネズミが堅いクルミに穴を開ける。そのみごとな技にまず感動しました。アカネズミはどのようにしてこのクルミに穴をあけるのだろうか。どのような動きをするのだろうか。穴のあいたクルミを見ながらいくつもの疑問が出てきました。ぜひこの目でアカネズミを見てみよう。私はその晩から裏山で観察を始めました。

アカネズミが夜行性であるということは図鑑にも書いてあります。でもどのようにして観察すればよいのか私にはわかりません。まずは食べ痕を見つけ

た石垣の前で懐中電灯を照らして待つことにしました。しかしいくら待っても姿はおろか気配さえ感じられません。

9月になりクルミが実を落とし始めると、それを石垣の隙間の近くに置いて観察を続けました。観察を始めて2ヶ月が経とうとしたとき、何かが隙間の奥で動く気配を感じました。じつとしていると鼻先を穴から出しすぐに姿を消しました。明らかに警戒していることがわかります。私は懐中電灯の明かりを弱くし、動かず待つことにしました。

その後、定期的に観察できるようになり、体のサイズや尾の長さなどからこの動物がアカネズミだとわかりました。とくに艶のある赤みがかつた美しい毛並みが強い印象として今なお心に残っています。観察を続けるうちに、かすかな物音や動きをも感じとることができるようになりました。

相手の暮らしを尊重し、じつと待つ。そしてこの目で見る。さらに、こうした自然との直接の接触は、感覚に磨きをかけることにつながる。アカネズミとの出会いの経験から私は、動物と親しく付き合うさいの大切な姿勢を学びました。それは今でも私の動物観察の原点となっています。



地域に息づく

暮らしの広がり

石窯焼き天然酵母パンを販売し、玄米菜食食事処として客をもてなす「ほしのさと工房」。ここでは、毎年冬に味噌づくりをおこなっている。各家庭でどのように味噌がつけられているのだろうか。その興味から今回初めて「ほしのさと工房」を訪ねた。ここで出会ったのが、「ほしのさと工房」の店主である山口とも子さんと、「ほしのこ会」。そしてここは、人と人との緩やかなつながりの現場であった。

「ほしのこ会」への出会い

2011年1月29日。冬の寒さを感じさせないくらい、穏やかな陽気に包まれた日。

私は大学2年生の春から市民の方に5アールほどの農地をお借りし、大豆を育てている。収穫した大豆で味噌をつくりたい。味噌づくりの工程は本で読んだことはあったが、じつさいに家庭でどのように味噌がつくられているのか直接見てみたい。そう考えていた私は、味噌づくりをおこなっている「ほしのさと工房」を訪ねた。

「今日味噌をつくるのは、ほしのこ会のメンバー」と最初に紹介してくださいましたのは、「ほしのさと工房」の店主である山口とも子さん。山口さんご自身は、今年の味噌づくりを終えていた。「ほしのこ会」が味噌をつくるための場所を提供するという形で今回「ほしのさと工房」で味噌づくりがおこなわれた。「ほしのこ会」とは、山口さんが実践するマクロビオティック(※)と呼ばれる食を大事にした暮らしの実践に共感し、「ほしのさと工房」を拠点に活動するグループ。山口さんのアドバイスを受けながら、4年前から味噌

づくりをおこなっている。

「ほしのさと工房」の味噌づくり

「ほしのさと工房」には、「ほしのこ会」をはじめさまざまな人が味噌づくりにやってくる。「決して募集をかけているわけではない」と山口さん。山口さんがつくった味噌汁を口にした人が、美味しいから一緒に味噌をつくらせてほしいと声をかけてきたことが始まり。当初は友達や親戚、バイトで働く従業員といった身内での取り組みだった。しかし、屋外で大豆を煮ているようすを見に来た近所の人も興味をもつようになり、参加者が徐々に増えていった。「12月になると毎週違う人が味噌づくりをしに来る。多いときなんて、一週間毎日違う人とやっていたくらい」と山口さん。味噌づくりの加工所ではないのだが、まちのパン屋が味噌づくりの寄り合い場となっているのだ。

味噌づくりは思ったよりも簡単な作業だった。この日の作業は前日に約5時間煮ていた大豆を再度加熱するところから始まった。大豆を温めているあいだに、塩と麦麴を手でこすりながら混ぜ合わせる「塩きり」をおこな



3 麦麴と塩を混ぜる「塩きり」をおこなう（両手でこすり合わせる）



2 麴屋に用意していただいた麦麴（麴は少し黄色がかった色味）



1 大豆を約5時間煮る（写真は前日に煮たものを再び温め直した大豆）

う。大豆が親指と小指でつぶせるくらい柔らかくなれば、大豆を機械でミンチ状につぶす作業が待っている。電動の機械に大豆を入れていくと、きれいにつぶされた状態で出てくる。大豆がつぶされた状態のものに、「塩きり」した塩と麦麴を加えて手で混ぜる。目安としては、耳たぶくらいの固さになるまで。固さを確認しては、大豆を煮たときに出た汁「アメ」を加えて固さを調節する。「アメ」と呼ばれることに疑問を覚えたが、煮汁の色が水飴を連想させるからだと感じた。固さを調節する目安が耳たぶくらいといっても、人によって感覚も異なるから、最後は経験が頼りになるのではないだろうか。

時間にしておよそ5分から10分かき混ぜていた。手で直接混ぜると、大豆の生暖かい感触が伝わってくる。それが手づくりしていることを実感させる。舐めてみると、しょっぱさだけが口のなかに広がった。

この日に用意された20 kgの大豆は、約100 kgの味噌になった。それを、参加した9組の家族が11 kgずつ桶に分配した。味噌にはカビが生えないように上から塩をふりかけ桶に蓋をして保存する。味噌は発酵して初め

て完成する。夏によすをみて黒カビを取り除いたり、かき回したりしながら、秋頃まで冷暗所で保存しておく。

朝の10時から作業に取りかかり、お昼12時過ぎには無事味噌をつくり終えた。初めて味噌をつくる作業に携わったが、少量の味噌であるならば、誰でも自宅でチャレンジできるのではないかと思うくらい手軽。しょっぱかっただけの味噌が、秋にはどう変化しているのか、今から楽しみである。

人とのつながり

「ほしのこ会」は2007年に結成。都留周辺に住む家族が所属し、「ほしのざと工房」を拠点に月に一度の定期会を開いている。子育てやマクロビオティックについてのトピックを扱った「ほしのこだより」を定期的に発行しており、マクロビオティックの勉強会や料理教室なども開いている。それに加えて、今回おこなった味噌づくりのほかにも山菜採り、無農薬の田植えにも取り組む。活動が多岐にわたり忙しそうだが、自分たちのペースを大事に活動をしている印象を受けた。「ほしのこ会」は、マクロビオティックを幹に集



6

混ぜ終われば、カビの発生を防ぐために塩をふりかけて、蓋をして保存する



5

つぶした大豆と「塩きり」した麦麴と塩を手で混ぜ合わせる



4

煮た大豆を機械に投入し、すりつぶす（写真のようにミンチ状に形を変えて出てくる）



釜で煮て柔らかくなった大豆を機械を使いすりつぶしている山口さんと「ほしのこ会」のメンバー

まった人たちが、何をしたいか考える」と語るのは「ほしのこ会」の代表佐野弘枝さん。活動に縛られるのではなく、子育てを中心に家族が集まり、手探りしながらやりたいことをやっていく。そんな緩やかなつながりだか

らこそ、さまざまな活動に乗り出していけるように映った。山口さんの次女である下村みどりさんは「常識を変えられる場所がここにはある」と楽しそうに話す。「人とのつながり」が生きる励みになるのだと、山口さんや「ほしのこ会」の皆さんと出会い感じた。マクロビオティックや子育てを中心とした暮らしの知恵や工夫を共有し合うほっこりとした空間。「みんなが集まってやる魅力や雰囲気子どもに伝えていきたい」と佐野さん。味噌づくりのように年に一度、地域に暮らす人たちが集まり、なにかに取り組める環境は貴重だと感じた。一人で作業に没頭するよりも、誰かと語り合いながらおこなうことで、ずいぶん気持ちの入れかたも変わる。

初めは味噌づくりの取材が目的で訪れた「ほしのさと工房」。工場ではなく、家庭での味噌づくりはどのようにおこなわれているのか知りたいという興味からであった。しかし、味噌づくりの作業から見えてきた「ほしのさと工房」は、地域に暮らすいろいろな人が集い交流を育む場所であった。

山口さんや「ほしのこ会」の皆さんと味噌づくりを通して一日を過ごしたことは、あらた

めて「人とのつながり」を考えるきっかけとなった。私たちは日頃から多くの人と関わり、ときには支え合って生きている。家族や友だち、学校の先生や同じまちに暮らす人たちが、誰にだって、身近なところに「人とのつながり」がある。だが、それをはっきり意識する機会は少ないのではないだろうか。

私は、都留に来て2年が経つが、大学生活を中心にさまざまな「人とのつながり」をもってきた。それをふだんにしたことはなかったが、同じ興味や関心事をもつ人がつながりあうことは大きな活力を生み出すのではないだろうか。それは「ほしのこ会」の皆さんのように、家族同士が集まり食生活や子育てを支え合い、生き生きしている雰囲気から学べた。この学びは、これから私が「人とのつながり」を深めていく手がかりになった。

(※) マクロビオティックは穀物菜食を中心とした「健康維持、体質改善、治病」のための食事法。その土地で採れたものをその旬に食べる地産地消や、化学的な加工や精製を加えない自然の恵みをそのまま消費する考え方を根本においた生活を実践する。(『MACROBIOTIQUE』845号、日本C-1協会、2008年、より)

写真を持って 街を歩く

百年ほど前に撮影された街並みは、今どうなっているのだろう。当時の面影を伝えるものが今でも残っているのだろうか。現況をじかに確かめるべく、古い写真を片手に街を散策することにした。

牛丸景太（国文学科1年）＝文・現況写真

新町通り

『奥隆写真コレクション』（本学フィールド・ミュージアム所蔵）のなかの一枚。当時新町には郵便局があり、写真中央にはその局前看板が見える。また、通りに敷かれた線路は「テト馬車」と呼ばれた馬車鉄道のもの。



明治43年（1910）撮影

風

が冷たく一段と冷え込んだ1月15日、大学から新町を目指して歩き出す。最近、私の移動手段といえばスクーターを使うことが多かったけれど、この日は歩こうと決めていた。歩かなければ見逃してしまうものがあると思つたからだ。とはいえ、明確な目的地というものはない。あらかじめ都留市消防署のあたりが新町ではないかという情報を得ていたので、その近辺を目指して歩くことにした。

「富士みち」と呼ばれる国道139号線沿いに進んでいくと、古い木造の民家や、白い漆喰の土蔵などが点々と残っていることに気づく。まるでそこだけ時間が止まったように見える古いたたずまいは、周りの新しい建物に囲まれながら、かつての街並みを彷彿とさせてくれる。

大学を出発してから30分。消防署の近辺までやってきたとき、1mにも満たない小さな石の道標が目にとまった。スクーターを運転していたら気づ

かなかつたかもし

れない。少し腰をかがめて見てみ

ると、その正面には「新町」の文字が

刻まれている。思いがけない発見から

探していた新町にたどり着いているこ

とを知り、また少し写真のなかの街並

みに近づけたようで嬉しかった。古い

写真が撮影されたのはどこだろう。あ

たりを見回しながら進んでいく。幼い

ころに経験した宝探しのような楽しさ

が私の足取りを軽くした。

この道標から目と鼻の先に、旧仁科

家住宅を活用した都留市商家資料館

がある。以前から一度行ってみたいと

思っていた私は「入館無料」の文字

に誘われるまま立ち寄ることにした。

そしてこの資料館で、また思いがけ

ず写真が撮影された場所に近づくと

になる。

土蔵造りの館内をひと通り見学し終

えたあと、館長の藤森利光さん（63）

にお話を聞くことができた。突然の訪

問にもかかわらず資料や地図を取り出

しながら丁寧に対応してくださった。

この附近の旧名
新町

メモ

仁科家は都留市内で織物業が盛んだっところ、絹問屋として栄えた家で、都留市商家資料館（写真右側の建物）となっている旧住宅は大正中期に建てられたもの。

都留市郷土研究会の皆さんへの聞き取りによれば、かつて新町にあった郵便局はこの商家資料館が建っている場所にあったそうだ。



現在の新町のようす (2011.02.01)

「もともとこの生まれじゃないんですよ」と語る藤森さんは、現在の北杜市出身で、40年ほど前に中学校教員として都留に赴任してきた。そのころは街に下宿屋を営んでいるところが多く、ご自身は八百屋の二階に下宿したことがあるという。かつて商家資料館になる前は、仁科家の二階にも学生が下宿していたそうだ。また、織物をやっている工場が何軒かあって、街なかを歩いていると機械化された織機（しよつき）の音が聞こえたのだとか。人の手足で動かす手織機とはまた違う、忙しい機械音が響いていたことだろう。

ストープを囲んでお話を聞きながら、携えてきた「新町通り」の写真をお見せした。すると、写っている街並みはまさに資料館があるこのあたりではないか、とのこと。どうやら大月方面にむかつて撮影されたらしい。じつさいに確認してみようということになり、藤森さんと二人で国道の脇に立つて撮影された場所を探してみた。遠く

に見える山はその昔「はげ山」だったそうだが、今では木々が生い茂っていて、その形をはつきりと確認することはできない。だが、ゆるやかな稜線や窪んで谷になっていく箇所がたしかに写真のものに似ている。どうやら撮影されたのはこの資料館の付近で間違いなさそうだ。

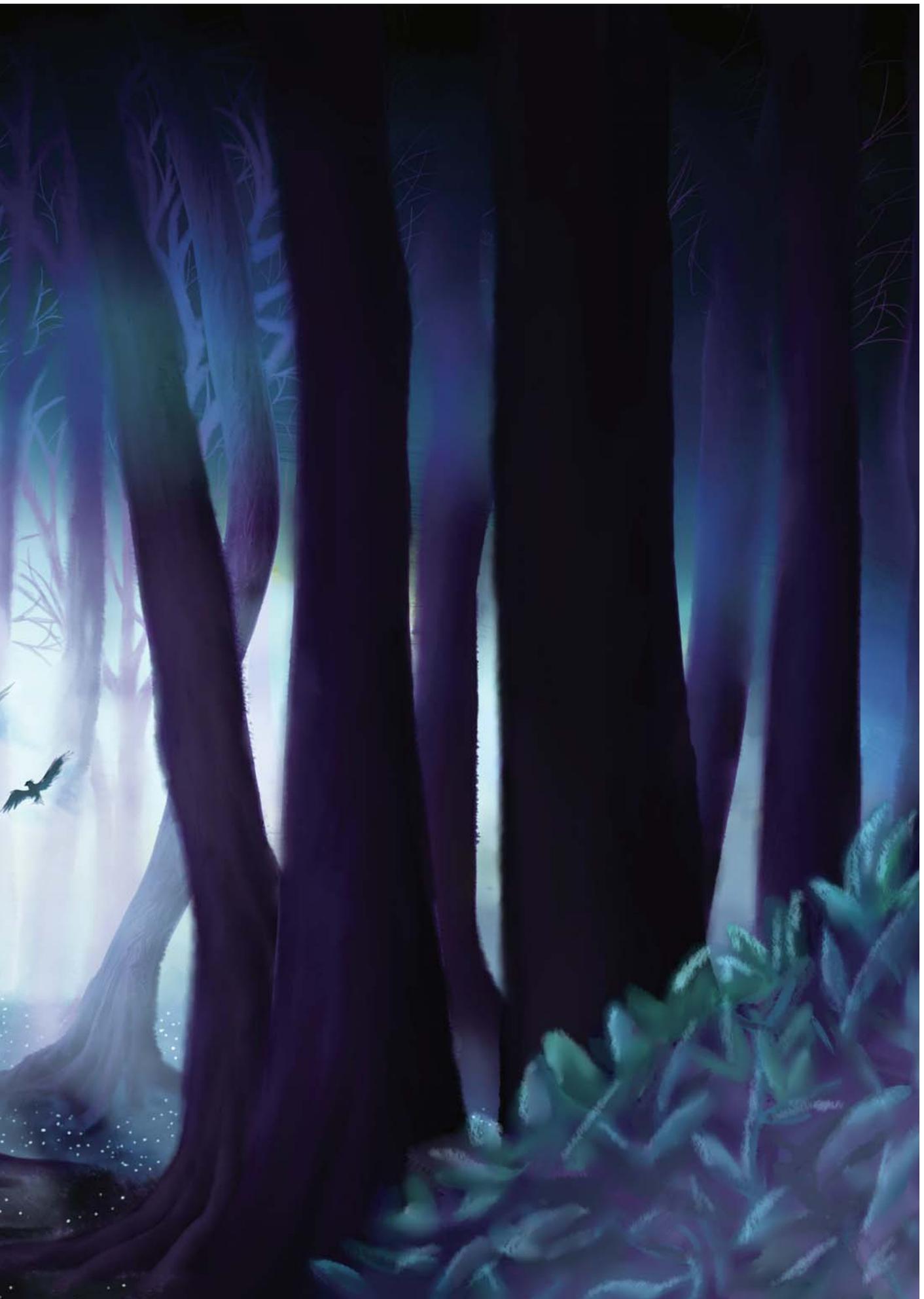
現在、このあたりはコンクリートの建物や真新しい家々が建ち並び、道には歩行者すれすれに車が通過していく。なかには古い建物も残っているが、百年という長い年月のあいだに街並みはだいぶ変化してきているようだ。往時の面影が失われていくことには一抹のさみしさも感じる。けれど、時代の変遷とともに街並みが変わっていくのは当たり前なことかもしれない。

そのなかで私を含めた後世の人たちは、写真をひと目見るだけで当時の建築様式や服飾、交通のようすが手に取るように分かる。もし、この写真が切り取った一瞬の風景を文章で伝えるとしたら、いったいどれだけの語を駆使すればいいのだろう。

百年前、写真のシャッターを切った人物がどんな意図で撮影したのかは分からないけれど、当時の街の雰囲気や生活感といったものは、写真だからこそ伝えることができるのだと思う。

写真を見つめる視線を目の前に広がる街並みに移してみる。百年前の人たちがこの風景を目の当たりにしたら、どんな感想をもつだろう。そう考えながら昔の人になりきったつもりで街を眺めてみる。すると、アスファルトで舗装された国道やその上を走っていく車の往来、コンビニがある見慣れた風景もなんだか新鮮に、今までよりも際立って見えてきた。

一枚の写真に導かれ、昔の面影を探すことから始まった街の散策は、見慣れた風景や当たり前のよう感じている今を見つめ直す小さなきっかけを私に与えてくれた。





「ナキゴエ」 北村彩乃（社会学科2年）

森歩ききの野帳から

第3回 リスとの出会い

朝、大桑でリスと会う。尻尾を振りながら、身体を幹にこすりつけていた。(2011.02.09)

2010年の4月21日から、毎週「都留自然遊歩道」(以下、森と表記)を歩いている。元坂の馬頭観音から入り、大桑まで歩く(8月27日から。それ以前は桑山公園までだった)。ひとつの場所にかようことを通して感じたことを、3回にわたってお伝えしたい。

森

を歩き始めてそろそろ一年を迎える。森歩きのことを振り返るには、森を歩

きながらがもつともよい方法だと思い、2月からはこれまでの出会いを振り返るように歩いた。そのなかで、リスとの出会いが僕のかなかに鮮明に残っていることに気づいた。

カサカサッ。12月23日、大桑から矢糸沢フィールドに抜けるアカマツ林で、なにかが落ち葉を踏む音を聞いた。軽い音だから大きな動物ではないだろうと、アカマツの影に身を隠し、じっと待つてみることにした。

カサッ…カサカサッ、…カサカサッ。進んでは止まることを繰り返しながらも、少しずつこちらに向かってくる。落ち葉が奏でる森の足音は、出会いの瞬間までのたのしみを演出してくれる。エナガやシジュウカラ、ヤマガラが鳴き交わす声も混じって心地よい。

たとえ姿をみることができなくても、音が心を満たしてくれる時間だ。

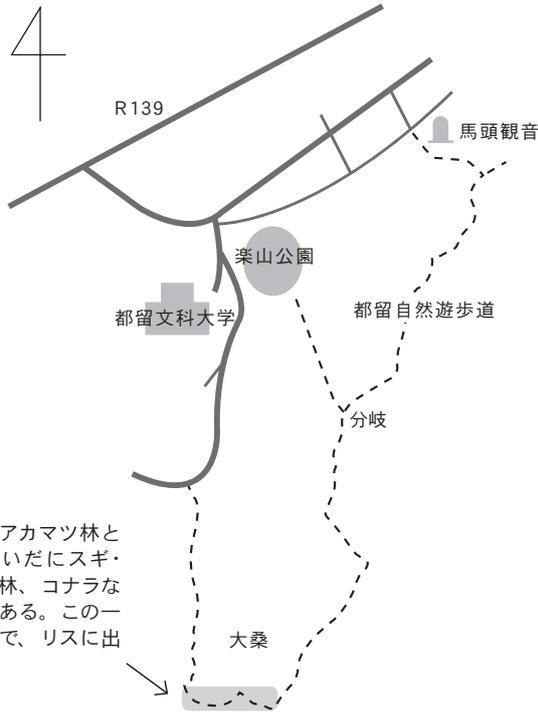
5分くらい待っただろうか。20mほど先の林床を茶色く小さいものが横切った。アカマツの影から身を乗り出し姿を追う。リスだ。ときどき止まっては首を伸ばし、周囲に気を配るような仕草をする。これがあの「足音」の正体だったのだ。

リスと言えば、ほとんど垂直な幹を上へ下へと自在に駆ける。僕はそれが不思議で仕方なくて、ずっと手足がどうなっているのか気になっていた。その疑問を胸に森を歩き続けた結果、願いに答える出会いが1月6日にあった。

僕がテンの糞を見つけて、採取しようかとしゃがんだときのこと。すぐそばのアカマツからリスが降りてきた。目と鼻の先とはこの



スギの根元に残ったリスのものと思われる足跡 (2011.02.13)



この東西の端がアカマツ林となっていて、あいだにスギ・ヒノキの針葉樹林、コナラなどの広葉樹林がある。この一帯のアカマツ林で、リスに出会うことが多い。

ことで、手を伸ばせば触れることができるような距離にリスがいる。とつぎにリスは脇にあったウリカエデに跳び登った。まだ若く細いウリカエデはリスの重みでも、ぐんとたわむ。リスはそれを待っていたかのように、またアカマツに跳び移り、一気に樹上まで駆け上がった。枝伝いに森の奥へと移動していく。50mほど先でまた下に降りてきて、今度は地面を駆けて、スギ・ヒノキの林のなかに消えていった。

僕はこのとき、無意識にリスの手足をみていた。5本に分かれた指に黒く鋭い爪(※)。その手足で、樹皮の割れ目や裂け目を掴んでいるようにみえた。

ツキノワグマやテン、イタチなども木を登るけれど、リスは彼らにくらべて長い指をしている印象を受けた。誤解を恐れず言えば、鳥類に近いような指の長さをもっている。

リスと似た生活を送る、ムササビの手足はどうなっているのだろうか。そんな疑問が新たに生まれる。僕の森歩きは、彼らを目の前にして、あふれる不思議と向き合う「たのしみ」に満ちている。

歩くことで出会い、観ることで知り、聴くことでたのしむ。リスとの出会いは、この一年の森歩きのたのしみを代弁してくれている。今となつては、リスに挨拶していくような気持ちで森へかよっている。

くりかえし足を運ぶうちに、ふとした瞬間にも「森」の情景を思い浮かべるようになった。そこには、森を歩き始めるときの「どこに、どんな生きものがあるのか」という疑問への答えが、少しばかり含まれている。

春の山でひっそり花をつけるイカリソウ。夏のクモの巣をかくぐつた先にあるオトシブミの揺籃。秋にクルミの実を運ぶリスの姿。冬、落ち葉の上を跳ね歩くツグミ。

自分のなかに、一年分の「森の生きもの地図」ができていく。歩きながら、出会いの地図をつくってきたのである。

一年前は、森の情景を思い浮かべることができなかった。どんな草木が生え、どんな動物が暮らしているのかを知らないから、思い浮かべようにも、ただの想像にしかならなかったのだ。

けれど今は違う。出会いの数だけ、彼らの姿をたしかに思い浮かべることができる。僕はようやく、この場所をフィールドと呼ぶだけの経験が積めてきたのだろう。

何度も足を運んでこそみえるもの、変化がある。捉えられる世界が、確実に広がっている。森歩きをとおして、僕は足繁くかような「フィールド」の意味を学ぶことができた気がした。

※のちに確認すると、リスの指は前足が4本、後ろ足が5本。正確には前足も5本だが、第一指(親指にあたる)がほとんどないため4本とした

ムササビをとおして

見えた世界

僕が住むアパートの屋根裏に開いた、直径30センチほどの穴。そこにはムササビが一頭棲んでいます。屋根裏から「ジャツ」と音をたてて蹴りだし滑空していく姿。その姿に惹かれるがまま出会いを重ねていくと、夕暮れ時に聞こえてくる不思議な音になるようになります。

狩野慶（ゆずりはら青少年自然の里） 文・写真

以前から気になっていた屋根裏のムササビ。同じ個体かどうかは分かりませんが、1月5日に自宅近くのサクラの木で、ムササビを目にしました。継続的にもっと見てみたいと思い、1月6日からほぼ毎日、屋根裏を眺めることにしました。

夕方、仕事から帰って駐車場に車を置いたら、カバンから赤いセロハンを張った懐中電灯を取り出し屋根裏を見上げます。巣穴のなかから赤く反射させた二つの目。それを確認したら腰を下ろし、飛び立つのをじっと待ちます。出巢を見届けたあとは、光で足元を照らさな

いと不安なくらいあたりは暗くなっています。耳を澄まし、なにか気になる音が聞こえたらそちらのほうへ向かう、聞こえなかつたら帰宅するという、気ままなひと時を過ごしています。

出会いを重ねていくうちにしげんと明らかになってきたことがいくつかあります。

1月の出巢時間は17時30分〜45分のあいだのようです。仕事を終え、急いで帰宅すれば間に合う時間です。このことは気軽に、そして継続的にムササビと出会うことができる大きな要因となりました。

アパートの南はどこどころ地面が削れて崖になっている急斜面です。その下には泉道が走っていて、そこへ歩いて下りるための舗装された小道がアパートの横から続いています。その周りに生える木々に少なくともほかに二頭のムササビが棲んでいることも明らかになってきました。屋根裏のムササビが飛び立つのを待っていると、背後から「ギィイ」「グァアア」などと別のムササビののびながら声が聞こえてきて、すぐ後ろを滑空していくこともあるのです。

滑空コースが一つに限られていることは興味深いことです。どうやら巣穴の半分近くを塞ぐ

屋根裏の鉄筋が邪魔をしているようでした。滑空コースの下で待機していたら、思わず首をすぼめてしまうほどの高さを滑空していきます。

いつぼう疑問に思うことも出てきました。

あたりが暗くなり始めたころ、「コトン、カサカサカサ……」と、斜面の下から何度も聞こえてくる音です。ある程度の重さと堅さのあるものが、落下して斜面を転がるような音。動物が下の斜面をこつそり歩いているような音にも聞こえました。毎日必ずというわけではありませんが、暗闇のなかからその音が聞こえてくると、未知の世界がやってくるような胸騒ぎがするのです。得体の知れない謎の音に少し不気味さを感じながらも、その音の主に興味を持つようになりました。

音の正体を知る

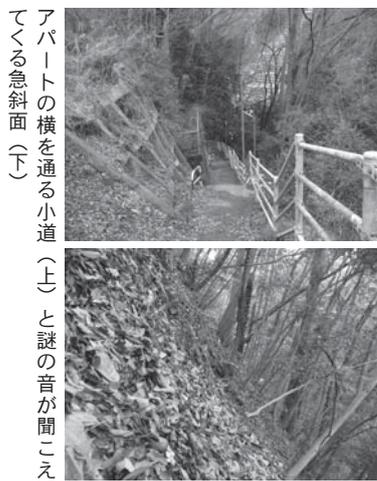
2月2日。この日は18時をまわっても屋根裏のムササビは顔を出しませんでした。ここ数日は日によって出巢時間に15分程度の差が出ています。このまま帰宅するのも物足りなく感じたので、泉道へと続く小道を歩くことにしました。すると頭上から「グァアア」と鳴き声が聞こえてきます。手すりを越えた急

斜面に生えるヤブツバキの樹上からです。3メートルほどの高さがあります。赤い光を向けると「パロパロ」と今までに聞いたことのない鳴き声が聞こえてきました。葉っぱが生い茂り姿を見ることができませんでしたが、その鳴き声の大きさと奇妙さに思わず後ずさりをしてしまったほどでした。光を消すと鳴きやみ、静寂が訪れます。その時、

「コトン、カサカサカサ……」

と例の音が聞こえてきました。ヤブツバキが生える斜面にそつと光を向けると、その光の線を一枚の葉がスツと通り過ぎていくのを目にしました。落ちていく青葉に導かれるように視線を落とすと、すでに点々とみずみずしいヤブツバキの青葉が落ちています。

目を凝らすと、人が立っていられないほどの急斜面の上に、茶色い枯れ葉が複雑な隆起



アパートの横を通る小道（上）と謎の音が聞こえてくる急斜面（下）

をかたちづくっていました。そこに落ちた青葉はその場で留まることはなく、スルスルと滑るようにくだつていき、時には枯れ葉に引っかかり一回転して斜面を転がりもしたのでした。これが謎の音の正体だったのです。一枚、また一枚と青葉が流れていきます。手に取つてみると、ぱりつとした堅さがあり、ある程度の重さがありました。

青葉が落ちるたびに「コトン、カサカサカサ……」と鳴り響きます。近くの木々を見渡しても、頻繁に葉を落としているようすも音もありません。おそらく樹上にいる姿かたちの見えない生きものによるものだろうと考えました。後日ヤブツバキの周辺を調べてみたところ、近くにムササビの食痕とみられる、左右対称にかじり取られた葉が複数枚見つかりました。

夜遅く帰宅した時など、屋根裏のムササビの出巢を見逃した日であっても、今ではアパート近くの小道に足を運ぶようになりました。足元さえおぼつかない真つ暗ななか、耳をつかって周囲の状況を探ります。「ポリポリポリ」というこまかな音の先には、両手で葉を器用につかんで食べているムササビの姿があります。いつばうで、時には想像のつかない音が

聞こえてくることも。その音の主を偶然、目にすることもありすが、正体がかめなままであることがほとんどです。姿かたちが見えなくても、今はその時そのときの出会いを楽しみに足を運んでいます。予想ができないからスリルがあり、出会いを純粋に楽しめるのだと思いました。

そもそもは屋根裏のムササビがきっかけです。どこか遠くへ足を運ばなくても、ごく身近なところに僕を強く惹き寄せる世界がひろがっていることを学びました。



ムササビが棲み、僕が住むアパート

センサーカメラが捉えた動物たち



キャンパス周辺のフィールドでは2008年10月から赤外線カメラによる動物の撮影をおこなっています。今回は2010年10月～2011年1月に撮影された動物の一部を紹介します。

身近なフィールドにはどのような動物たちが暮らしているのでしょうか。

本学フィールド・ミュージアム = 文・写真



冬毛のテンは金色の体毛をしています。野ネズミをくわえた姿も確認できました。



立派な角をもった雄です。春先にはこの角を落とし、また新しい角が生えてきます。



走っているところが撮影できました。尾の先が白いことがわずかに見て取れます。



大桑山を歩いていると、たまにイノシシが目の前を横切ることがあり、びっくりします。



キジ 中屋敷フィールド 2011.01.08

キジの雄です。この写真のほかにも何枚か写っており、この道を行き来しているようでした。



エナガ 大学キャンパス 2010.12.23

この地域交流研究センター前の生け垣は、ほかにモズやガビチョウなどの鳥類が利用しています。



ネコ 大学キャンパス 2011.01.20

大学キャンパス周辺はネコが多く、この場所では頻繁にカメラに写ります。



タヌキ 中屋敷フィールド 2011.01.05

体毛の白いタヌキが写りました。部分的に白化したものですが、滅多に会えません。



ノウサギ 中屋敷フィールド 2011.01.21

このあたりのノウサギの体毛は、周年にわたって茶色です。



イタチ 中屋敷フィールド 2011.01.05

テンと混同されることがありますが、イタチのほうが小柄です。



木に関わる人に 会いに行く

前号で、木工家具をつくっているかたにお話を聞き、もっと、木に関わるいろんな人に会ってみたいと思うようになった。私がこれまで都留で見してきたものや出会ってきたものごとのなかに、何かそうした人との接点はなかっただろうか。そう思ったときに思い浮かんだのが、「うさぎ椅子」のことだった。

香西恵（社会学科2年） || 文・写真
南都留森林組合 || 写真提供



南都留森林組合。入り口の横にたっているのぼりには「きのこ 各種販売中」の文字

戸 沢のカフェ「かたつむり」には、本学の授業の一環で何度かうかがっている。そのとき気になっていたのが、窓の外を向いて、日差しを受けてあたたかさうにしていた丸太の椅子だ。2本の背もたれがうさぎの耳のようでおもしろい。座ってみると予想外な座り心地のよさ。シンブルな丸太の外見にそぐわず、計算されているかのように、体に馴染んだ。つくっているのはどんな人なのだろう。

南都留森林組合へ

椅子をつくっているのは、「南都留森林組合」の芦沢茂義さんあしざわしげよし(68)。2月7日午後5時、南都留森林組合へ向かった。

このあいだまでの冷たさはゆるんで、少し湿った匂いのする空気を吸い込む。春のように風がぬるい。都留トンネルの手前で右にそれ、坂をのぼり鍛冶屋坂のトンネルをぬけ、

川を渡ればすぐだ。都留第一中学校の向かいに、「南都留森林組合」はある。自転車をこぎながら、どんな人たちに出会えるのか、わくわくしていた。

サッシ戸を引いて玄関口に立てば、ひと目で部屋のなかが見渡せる。こぢんまりとしたところだ。小さな玄関スペースにはいつぱいに、土のついた黒い長靴が並んでいる。

5時を過ぎて、ちらほら山から人が帰ってくる。すぐに芦沢さんも帰ってきた。黄色いジャンパーをきて、足元は黒いひざ下までの足袋。少し小柄で、ゆるくしわの刻まれた顔に、四角いめがねをかけている。

丸太の椅子をつくり始めたのは昨年。戸沢で開かれるお祭りに組合が出店し、職員それぞれが思いおもいに木工製品をつくって販売した。それを見た「かたつむり」から注文が入り、注文に沿って椅子をつくったのが芦沢さんだ。初めは普通の丸太の椅子だったが、注文に応じて背もたれをつけたら、うさぎのようになった。

玄関の脇に短く切った丸太が2つ立ててあ

った。これが組合で販売している椅子らしい。上には刃渡りの長い、赤いチェーンソーが置いてある。椅子は、丸太の粗い表情をそのまま残している。

丸太を切つて皮を剥ぎ、側面に持ち手となるへこみをつくつて、ペーパーをかければできあがる。作業はほとんどの工程をチェーンソーでおこなう。「つくりが粗いから」。椅子は部屋のなかではなく、外で使う用だ。

樹種はマツかヒノキだという。間伐材を利用するが、「スギはだめ」。スギは硬いところと軟らかいところがはっきりわかれていて、使っているうちに軟らかいところはへこんで、見た目が悪くなってしまうという。ケヤキやナラなどの広葉樹も適さない。丸太の椅子だから、重くて使いづらいのだ。

芦沢さんは何度も、話せることなんかない、組合の仕事だからやっているだけ、こだわりなんてないよ、という。たしかに芦沢さんにとって、「椅子づくり」は組合のいくつかわる仕事のなかの一つにすぎないのかもしれない

い。けれども「こだわり」のようなものが聞けることをどこかで期待していた私に、芦沢さんの言葉はすんなりと入ってきた。なぜだろう。

じつさい、謙遜でもなく、その言葉どおりなのだろう。けれども「話すことはない」といいつつも、椅子について具体的にたずねれば、はつきりとした答えが返ってきた。樹種選びの理由からは、使う人のことを想像してつくっているのだということが感じられた。仕事だからこそ個人的なこだわりはない。いっぽうで、仕事だからこそ、きちんと向き合っているのだ。

ふだんは、都留市、旧秋山村、道志村、西桂町などにまたがって、周辺の山の手入れをしている。冬は間伐、夏は下刈りが主だ。山で作業ができない雨の日に、椅子をつくる。芦沢さんがこの仕事を始めたのは、一昨年からだという。それまで西桂町で測量機械の販売をしていたが廃業し、たまたまこの森林組合で募集があったので、息子さんと一緒に

応募した。この組合で働いているほとんどの人がそのときに一緒に入った同期で、いちばん長く働いている人でも3年くらいだという。芦沢さんが最年長だ。この3年の契約が終わったら、続けるつもりはない。ちょうど70歳にもとどくので、やめようと思っている。

私がこれまでお会いしてきた木に関わる人は、昔から長くその仕事を続けてこられたかたばかりだったから、驚いた。いろいろな関わりかたがあるのだ。木との向き合いかたはさまざまだ。長くやってきた人もいれば、最近始めた人がいる。趣味で始めた人、たまに就職した人。昔から当たり前に仕事としてきた人。それぞれ、でてくる言葉は違う。

どうして木を切るのか

芦沢さんのお話は、組合の仕事のなかからでてくるあつさりとしたものだった。仕事だから木を切る。雨の日は椅子をつくる。特別な理由はない、という。「ただ切るだけ」。

私はどうだろう。高校での林業や木工の授



靴箱の前に置いてある丸太の椅子

業以来、「木を切る」ことに関心を持ってきた。数えるほどしかないが、じつさいに「木を切る」経験を重ねるなかで感じるのは、自分より圧倒的に大きな、長い時間を生きてきた存在に対して立ち向かう、畏れや必死さのようなものだ。どうして木を切るのかと考えてみる。たぶん、木に向き合うことをとおして、向き合う自分がどんな人なのか、見えてくるような気がするからだ。たとえばそれが、椅子づくりや作品づくりを通して表れてくるように思う。

だから私は、木を切る。椅子をつくる。ほかの人がどんなふうに向き合っているのか知りたくて、木に関わる人に会ってみたくなる。



昨年、お祭りでの出店にむけ丸太を加工し（下写真）、できあがった作品たち。手前が椅子、その上に乗っているのがシーソー。左手には彫刻が並ぶ



今日も、芦沢さんは山で木を切ってきた。このごろは、木を切ると鳥が寄ってくるという。暖かくなってきたので、木を倒した振動で落ち葉の下から虫がでてくる。それを狙って、鳥が食べにくるのではないかとのこと。暗い林では鳥はこないという。虫がいないのだろうか。たずねると、暗いところでは鳥は虫が見えないのではないかとのこと。

なるほど。そんなふうに、今日の山のことを話す芦沢さんは、なんだかいきいきとしていて、楽しそうだ。たとえば木を切る仕事のおもしろさはなんですか、とたずねても、芦沢さんから積極的な答えは返ってこない。けれど、今日一日の山のことをたずねれば、きつと、いろいろな言葉が返ってくるような気がした。

あらためて椅子に座ってみる。丸太の粗削りさ、予想外の座り心地のよさ。淡々とした芦沢さんの姿勢はそのまま、芦沢さんのつくるその椅子に表れているようだった。

山を観る人

炭から山を観る

山と長くかわる人の言葉には、山での豊富な経験がにじみ出ている。こう感じてから、山と歩む人のことが気になりだしました。都留には目と鼻の先に山があるけれど、私は山の何を知っているでしょう。山とかかわる人は山をどう捉え、どんなことを考えているのでしょうか。「株式会社炭香」を経営する、小俣強さん（52）を訪ねました。

石川あすか（社会学科3年）＝文・写真

都 留市、大野。行く手には壁のように立ちほだかる、急な山道が続く。自転車をせつせと押してのぼっていると、山

あい「炭香」の文字が見えた。小俣さんの仕事場は山々の谷間に建っている。

炭焼きというと、昔ながらの小ぶりな窯

で炭を焼き、山のなかで暮らす姿が浮かぶ。

けれど、ここ炭香では少し違う。炭を焼いて加工し、炭製品をつくっているのだ。

炭香の三代目社長、がっしりとした体格の小俣さんは、柔らかな笑顔で話してくださいました。

炭焼きを始めた経緯は20年前、初代社長の故・小松徹さんが経営していたところに遡る。当時は山英建設という社名で土木業をやっていた。大量に出た木材の処理に困り、小松さんが祖父のやっていた炭焼きを思い出して、炭の研究を始めたのだ。小松さんの代から始まり、炭の研究を重ねて7年。特許製品、「サイエンスボード」を開発した。サイエンスボードは壁や天井用材になる炭の板で、脱臭、消臭などの効果があるという。小俣さんが社長となった今は土木業から手を引き、炭の技術を応用して板状の飾りや石けん形・砂利状の置きものもつくっている。



炭焼きと山

炭用の木材は森林組合や民間の企業が伐り出してきたものを使っている。炭を焼く温度の管理は経験と勘ではなく、機械でお

こなう。

小俣さんの炭焼きは昔のとは違って、どこか山とかけ離れている気がした。小俣さんに山はどう映るのだろうか。



5台の炭焼き窯と小俣さん

「山のことは気にしていますよ。あちこちに出かけたとき、ここは手入れが行き届いているとか。きれいな山だと、どういう事業をしているのかなって観てる。有名な木材の産地はね、山がきれい。ただ、きれいなところをちよつと外れると、あれっ？と思う。暗い山になっちゃう」

小俣さんの言う「きれいな山」とは木々の根元に光が差し込み、草木がいきいきと芽吹く明るい山のこと。けれど「今は暗い、怖いって山ばかり」なのだそう。

小俣さんは都留市のお隣、道志村の出身。小学生のころは、ここ大野まで川魚を獲りに来たこともあった。そのころは多くの人

て帰っていいなど、暗黙のルールがあった
そうだ。

昨年の四月、サンショウの葉を採りに行っ
たときのことを思い出す。同行していた井
上さんは、山を覗るなり「荒れてるねえ」
と口にした。山菜を採る人のなかには、歩
きやすいように枯れ木を伐り、下草を刈る
人がいる。「荒れて」いたのは、山へ入る人
が少なくなっているからだ、井上さんは
言っていた（サンショウについては本誌65
号を参照してください）。「暗い山」と「荒
れてる」山。どちらも人が入らなくなっ
てきている山だ。

「工業には手を出さないけど、林業はどうに
かしたい。一次産業を中心になんとかした
い。一次産業は人間の生活に直結して
るから、消費者も私たち生産者も両方が考
えていかなきゃ」

炭を焼いて加工し、それを販売する。私
から見ると小俣さんの仕事は炭業だけれど、
林業を立て直したいという。私は小俣さん
と山に、接点が見つけれずいたから、そ
の言葉が少し意外だった。

山だけでなく、将来的にはもつと大きなサ
イクルで、川や海、そのかたわらで暮らす人
を想って仕事ができたい。そう語る小俣
さんは、仕事とかかわりの深い「エコ関係の
講演会」へ、時間の許す限り参加するという。
経験から考える、ということ

炭にする木を伐り出す作業は委託してい
る。けれど、小俣さん自身が山から伐り出
すこともある。伐り倒した木が跳ね返ってき
て、肝を冷やすこともあったそうだ。私も、授
業や講座の一環としてノコギリで木を伐り倒
したことがあるから、小俣さんの恐怖は想像が
つく。それに、伐り出しには恐怖ばかりでな
かったことも想像できる。木を伐ったときに
漂う、心地よい香りを鼻が覚えているのだ。

小俣さんも私
も、同じく木を伐
るといふ作業をし
た。けれど、考え
ていることはずい
ぶん違う。小俣
さんは自身の原
体験や勉強した



小俣さんと山を望む

こと、そして山へ入ることを通して広い視野
をもち、そのなかでの木を伐る意味を考えて
いた。けれど、私の頭にあつたのは木を伐る
楽しさと、少しの恐怖ばかりだった。

これまで私が受けてきた授業や講座。こ
れを主催した人たちの、話の「趣旨」はどん
なものだっただろう。山全体・日本全体で
見たときの役割を考えようというものだった
けれど、私はそれを忘れていた。なぜだろう。
きつとほかの人が感じ、考えたことだった
からだ。「趣旨」は自分自身で感じたことでも
考えたことでもない。

木を伐ったことがあるから山作業の話
を思い浮かべることができた。自分自身で感じ
考えたことは、嬉しい気持ちや恐いと思う心
と一緒に、何度も思い描くことができる。た
とえ頭では長いあいだ忘れていたとしても、
感覚が覚えているのだ。それに誰かの話を聞
いたとき、自分の経験と重ね合わせれば、そ
の人の言葉はグッと自分に近づいてくる。経
験の大切さは以前から感じていたけれど、小
俣さんと会い、じつさいの経験に基づいて考
える大切さに、あらためて気づくことがで
きた。

背景の写真：炭でつくった鬼瓦風の板。いかつい顔が凹凸で表現されている

農 こよみ

春には田植え、秋には稲刈り。お米づくりの詳しい流れはわかっているも、その行程の詳細についてはよく知らなかった。一連の作業はどんな頃合いを見ておこなわれているのだろうか。1月21日、十日市場で農業に携わる渡邊宗男さん（80）を訪ね、お米づくりについてお話をうかがった。

私の実家では祖父母がお米づくりをしている。私自身も大学生になってからは、長期休暇などを利用して田植えや稲刈りを手伝ってきた。作業の合間、畦に座って風を感じる時間が何とも心地よかった。けれど約2町歩ある田んぼでの作業は7日以上続き、ただ淡々と同じ作業を繰り返す毎日に、飽き飽きしてしまうこともあった。

そんな折、祖父から「お盆のあたりに穂がソラガマ（鎌のこと）のように垂れるとその年は豊作になる」という話を聞いた。稲とお米のつくり手とのあいだの静かな会話。そのとき初めて、今まで自分は作業としての「お米づく

り」しか見てこなかったことに気がついた。もう一度、お米づくりを見つめ直してみよう。それが今回の取材につながった。

渡邊さんのお米づくり

渡邊さんによると、お米づくりは3月末、イモチ病を防ぐために種もみを消毒することから始まる。その後、もみを袋に入れて風通しのよい日陰にして干す。苗床をつくる2、3日くらい前に降ろし、二晩お湯に入れて芽出しをする。私にとって芽出しは水に入れておこなうもの。そのため、このお話を聞いたときは「お湯に入れるのですか？」と聞き返してしまうほどだった。

種をまいた苗床には新聞紙、ビニール、保温マットをかぶせる。芽が出てきたら新聞紙を外す。さらに苗が10cmくらいに生長したらビニールを外すのだが、その時機の見極めが難しい。「なかなか思うようにいかないら。毎

年同じようにやっつけていてもお天気の影響で、毎年素人」

たしかに年によって雨が多かったり、気温の高い日が続いたり。毎年同じようには決していかない。長年、お米づくりをしているにもかかわらず、ご自身を「素人」だと話す渡邊さん。自然を相手にしているからこそ、謙虚になれるような気がした。

苗の育ち具合を見ながら田起こしを始める。十日市場ではこの作業を「アラクリ」というらしい。その後、畦に沿って田の内側に、「テアデ」とよばれる土を少し盛った畦をつくる。手でつくった畦だから「テアデ」。

「テミドをこしらえてねえ、田のまわりをぐるぐるまわしといて、（水を）ここで入れた、ここで入れたって入れていただよ」

「テミド」とは「テアデ」と畦とのあいだにできる、手でつくった溝のこと。田に四方から水を回し入れ、「テミド」を通して循環させる。これは水

温を上げるための工夫である。十日市場では湧き水を利用してお米づくりをおこなっている。湧き水の水温は年間を通じてほぼ13度。稲を育てるには水温が低すぎるのだという。

渡邊さんは5月末に田植えをしている。田植えのあとは、水の管理が欠かせない。崖の多い地形である十日市場あたりでは、田の水持ちが悪いという。

「毎日、田と相談」
朝のうち1、2時間水を入れて、いっぱいになったら止めるということを経験が出るお盆あたりまで続けるそうだ。

私の祖父もこの時期になると、朝ごはんの前に田を見に行っていることを思い出した。今年の夏は私もついでに行こうかな、ふいにそんなことを思った。稲刈りは9月末。その適期について渡邊さんはこう話す。

「細いほうから色が出てくるだよ、それが曲がり角まできたら刈りごらだちゅうわけ。（穂の根元に）まだ青米あおこめがあるぐらいでいいちゅうわけ」

稲刈りのあと、天候が良ければ10日くらい乾燥させて脱穀する。お米の水分が16%くらいになるまで乾燥させる。そうなのだが、そこで渡邊さんの長年の勘が生きてくる。

「（お米を）喃んでみるちゅうわけ。喃んだ具合でねえ、硬さが分かるちゅうわけ。コキンちゅう音がする」と笑ってみせた。

お米のつくり手が感じているもの

渡邊さんのお話をうかがって、私が知っているお米づくりは、そのほんの一部にすぎないことをあらためて感じた。

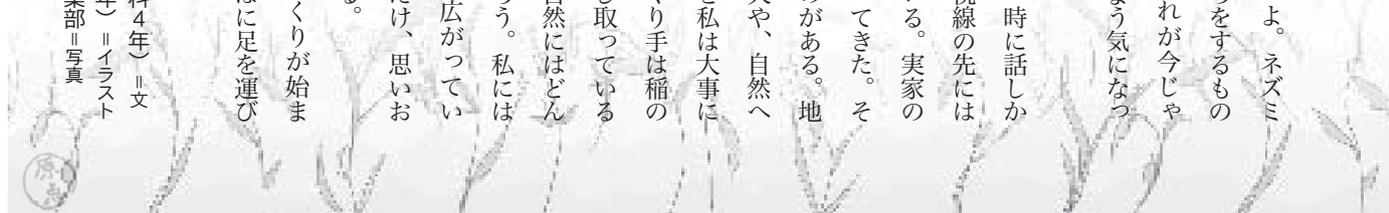
たとえば、動物の話。十日市場では春先ごろからイノシシが出てきて田畑を荒らすという。ほかにもタヌキやキツネ、サル、ハクビシンが田畑に降りてくることもあるそうだ。それらはみな一様に厄介な存在なのかと思ひ、尋ねてみた。すると、すぐに返事がかえってきた。

「キツネなんか何もしないよ。ネズミを捕ったりねえ、いたずらをするものをとるちゅうわけ。これが今じゃ……何でもみんな殺しちまう気になつちゅう」

稲の生長を日々見守る。時に話しかけながら。そして、その視線の先には野山に生きる動物たちもいる。実家のまわりでも休耕田が目立ってきた。それと同時に失われゆくものがある。地域ごとのお米づくりの工夫や、自然への心づかい。そんな思いを私は大事にしていきたい。お米のつくり手は稲の生長からどんな合図を感じ取っているのだろう。田んぼを囲む自然にはどんな思いを持っているのだろう。私には見えない世界がまだまだ広がっている。お米のつくり手の数だけ、思いおもしろい「農ごよみ」がある。

もうすぐ今年のお米づくりが始まる。私はこれからも田んぼに足を運び続けていきたい。

千葉真希（比較文化学科4年）
北村彩乃（社会学科2年）
フィールド・ノート編集部 写真



と生きる

織物

都留の産業・経済の基盤となった織物産業の歴史を探るべく、私は都留市谷村にある「ミュージアムつる」に足を運んだ。そこで、現在都留市で機織りをされている方を紹介していただき、お話をうかがうことができた。私が聞いたのは、織物と「伝統ある産業」としてではなく、「生業」として向き合う人の生き様であった。

織機と原田多津子さん

「ミュージアムつる」の近く、細い路地に入ると、「カタン、カタン、カタン、……」と速いテンポで、リズムを刻む音が聞こえてくる。家々が立ち並ぶ路地、風景に溶け込み、ひとめ見ただけでは、そうは見えない工場のなかで織物の機械が動いている音だ。

「なんだろうって、見に来る人もいるよ。機を織る音が懐かしいんじゃない」

そう言って笑う、原田多津子(73)さん。ご自宅と隣接した、10畳ほどの工場のかには、中央辺りに1台、入口から見て左側の壁にそって2台の機械が設置されている。中央にある高さ3m、横2m、奥行3mほどの大きさの機械は「織機」といい、縦糸と横糸をセットして機を織る機械である。壁にそって設置された2台の機械はそれぞれ「くだ巻き」、「くりこし」という。この2つは、仕事の受注先の会社から送られてくる糸を、織機にセットできるように巻き直すための機械だ。どの機械もところどころ修理しており、長年使いこまれてるように見える。

原田さんによれば、織機は約40年間使っているそう。現在この工場にある

織機は1台だが、以前は3台が稼働していた。なかでもいま工場に残っているものが一番古いそうだ。

「やっぱり使い慣れているから。油もしみ込んでいるし。寒くて乾燥する時期には埃がまっけて生地にくっついったりするから、こうやって霧吹きでちよつと濡らしたりするんだよ」

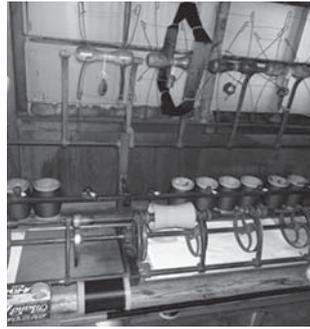
原田さんは話しながらも、織機をさすつたり、糸に絡んだ埃を落としたり。織機を長年大切に使用してきたのだろう。

織物についての知識が浅い私にとつて、この工場にある機械は大掛かりなものに見えた。「大きいですねえ」と私が言うと、「すごいんじゃない」とおっしゃっていた。だがこの織機は使いかたを変えればさまざまな種類の生地が織れるそう。この時に見た限りでは、縦糸も横糸もたくさんあって、目が痛くなるほど細かな作業をしているようだ。

「細かいけど、何事も慣れ。マフラーなんかも、やりようで(できる種類は)たくさんだよ」

原田さんは都留市盛里のご出身。中学を卒業後、奉公先で織物をされていたそう。その後23歳で結婚されて、都留

右：くだ巻き。この機械で、横糸を織機にセットできるように巻き直す。奥には、機械類の簡単な修理のための工具がある。



左：くりこし。受注先から送られて来る糸を、くだ巻きにセットできるように巻き直す機械。送られてきた糸を織るまでには少なくとも2つの工程を踏む必要がある。



市谷村に移り住んでから50年、ご主人と2人、ここで機械織りを続けている。

この土地で原田さんが機械織りを始めた当初のことについて尋ねてみると、

「昔はこの辺にも（同業者が）いっぱいいた。隣のうちでもやってたよ。でも今じゃ聞かないね、やっぱり仕事が全然ないし」

私は原田さんのお話を聞きながら、なんともいえない切なさを感じた。

また、同業者がまわりに少なくなることで困ることもあるそうだ。機械の修理をするのも一苦労らしい。

「修理してもらわなきゃしょうがないときもある。でも修理する人ももう年がいつてるから。仕事がないから、若い人に『継いで』と言うこともないし」

その言葉からも、都留の織物産業が下火になっていくことがうかがえた。

仕事の量だけでなく、織物を支える環境も変わってしまった。原田さんも以前は地区の織物組合に参加していたが、今では登録数が少なく、商工会のなかに組み込まれるような形で織物組合があるそうだ。昔はあった組合独自の制度もいつの間にか無くなってしまった。
「昔は織機を使うのにいくらからお金がい

ったんだよ。組合に登録しなければいけなかったし。廃業するときにはお金がもらえたりした。だけど今は登録なんて言わないし、機械を手放すには逆にお金がいるようになった」

と言う。昔この近所にあつた職業訓練校のように、織物の技術を学べるところも、今ではもうなくなってしまった。また、今でも都留市内各地で目にするのができるクワの木々などから、この土地で以前、繊維産業が盛んだったことはわかるが、現在でもそれを生業なりわいとして生きている人を見るのは難しい。

「あと何年か分らないけど。元氣なうちはね」

今は受注の量も減り、大きな収入を得られるというものでもなくなっているのだろう。織機は3台くらいないと、それを糧に生活することはできないそうだ。だが原田さんは織機を1台に減らした今でもずっと織物を続けている。そのお話から私は、原田さんが織機を単なる仕事として扱っているわけではないように思った。生活の一部として、織機が位置づけられている。

原田さんにとっての「織物」は何事に

も替えがたいもののように思えた。自分が自分であるために必要なもの。それが原田さんの織物なのだ。

取材の帰り、私は、原田さんにとっての「織物」は私にとつての何にあたるのかと考えた。気づかないほど身近にある大切なもの。無理に意識するでも、特別扱いするでもなく、生活のなかでごく自然に向き合っているもの。そのようなものに、いつか私も出会いたい。

持田睦乃（社会学科2年） 文・写真



原田さんのご自宅と工場がある路地。初めて訪れたときは、ここに工場があると思えなかった

生け花の

こころ

道を歩けば、花の匂いに季節を感じ、生命の強さを感じる。私たちが起きているあいだも、寝ているあいだも、花は凜と立ち生きている。富士急行線 都留文科大学前駅の待合室に、本学の学生が生けた、生け花が飾られていた。寒さしのぎに入った待合室はその生け花によって、パツと明るくなっていると感じた。生け花とは、どのような世界なのだろうか。

初めての作品
テーマ：バレンタイン

華道サークル
都留文科大学
寺元 静香

2月2日私は、都留文科大学華道サークルで生け花を体験した。生け花を教えてください。さつたのは、華道サークルで指導をしている、志村千代子しむらちよこさん。

志村さんに、生け花とは、いったいどういうものなのかを聞いてみた。

生け花とは、四季折々の樹枝・草花などを切って花器（生け花の道具）に挿し、その姿の美しさ、いのちの尊さを表現し鑑賞する芸術であり、日本の伝統文化だそう。花を飾るといふ文化は室町時代より、仏前へ草花をお供えることから始まった。これが、生け花のルーツ。

明治初期に外国へ生け花を紹介して以来、生け花は、世界共通に知られるようになった。最近流行っているフラワーアレンジメントは、花と花との隙間を埋めるように飾られていることが特徴。いつぼう、生け花は空間を生かし飾られている。茎から葉、花の色や形を生かしお互いを引き立てあい、魅せることが生け花の特徴だ。

「花は物体ではなく、生きている心がある」と、志村さんは生け花の魅力を話してくださいました。

志村さんが初めて花の魅力を感じたのは、まだ小学生だった十五夜の日のこと。

母親が団子の横に飾ったススキと十五夜じゅうごやばな花に、ちょうどお月さまの光が差し込んで、子どもながらに、「あー綺麗だな」と大変感動したそう。

剣山も花器もなく、ただ一升瓶に飾られているだけではあったが、花の美しさに魅了された志村さん。このときは、今でも鮮明に記憶されているそう。私は、この出来事が志村さんの生け花の原点になっているのではないかと思った。

一つの花を見て何を思うか。同じ種類の花でも、首の向き、花びらの開き方はまったく違う。そこから感じるもの、花を見てどう生けるかという想像力から感性を磨くことが、生け花の魅力の一つでもあると、志村さんはおっしゃっていた。

これは花だけではなく、どんなものにも当てはまることだと私は思った。音楽、絵、景色、そして人。一つのものを見て何を思い、感じるか。そこから感じるものは、人それぞれ異なるだろう。無理に言葉を尽くすよりも、まずは何かを「感じる」ということが大切なのではないだろうか。そして、何かを感じるということが簡単そうで難しい気もした。

私も、生け花を体験した。

まずはじめに、主役にしたいたい花から生ける。それから、その花を中心に空間をつくりながら、ほかの花も生ける。この「空間をつくりながら生ける」ということが難しい。

「同じ高さに、花を並べて生けると、花同士がケンカしてしまうから、それぞれの花の位置を変えたり、空間を与えることでお互いを引き立て合わせるのが大切だよ」と志村さんは教えてくださった。

私は、バレンタインが近かったので、バレンタインをテーマに花を生けた。主役とした花を2本用いて、互いの花と花を向き合わせ、ハートの形を意識してつくった。

そして、そのハートの形を引き立たせるよ

うに、周りを花や草で色をつけた。この時、花の表面を上に向けて生けることがポイントだと、教えてもらった。最後は剣山を隠すように下部に花を生けていった。そうすることで花を美しく見せることができるそうだ。作品が完成した後、志村さんから「いいわね」と感想をいただいた。その時、私は素直に嬉しく思った。生ける楽しさ、見てもらう楽しさを感じた瞬間だった。

体験してみて、花は生ける位置によってまったく違って見えることに驚いた。見方によつて主役となる花が変わり、それぞれの花の色や形が映えてくる。それがおもしろいと感じた。

生け花には、自分の思いを託すことができ、それは可愛らしくも躍動的にも、生ける本人自身のところが映しだされる。こころの映し鏡のようだ。だから、素晴らしい作品をつくらうと意気込むことなく、自由に思いのまま生けていけるところに、私は魅了された。しかし初めての生け花は、センスを問われているようで、難しくも思えた。

生けた後は、作品をスケッチし描き残す。

スケッチすることで、花の生け方の変化が記録され、自分の変化を描いていくようで、どんどん作品を書き残していききたいという気持ちになる。

花は「一日、一日」刻々と形、姿を変えていく。それは生きている証拠であり、美しい瞬間、瞬間でもある。

私たちの生活のなかにも、このように美しい瞬間、瞬間が溢れている。

忙しい毎日でも、コーヒーを一杯飲むくらいの時間はある。その時間を、花や自然に触れる時間にも充てていきたい。そして、いつも歩く道をゆつくりと歩いてみたい。

花が咲き散りゆく姿、春の匂い。今なら、そういうものを感ずることができると気がする。

寺元静香（社会学科2年）|| 文・写真



二つ目の作品も
テーマはバレンタイン



現況 (2011.02.13)



下町屋台

昭和11年(1936)撮影。屋台をひく本祭りは戦争により、この年をもって中断される。子どもが多く、にぎわっていたようすがうかがえる(武井一郎氏所蔵)。

記憶

フィールド・ミュージアム部門でデータベース化を進めてきた『奥隆行写真コレクション』などの写真をもとに、わたしたちは写真にまつわる生活の記憶をさまざまなかたに伺ってきました。今回は、都留市郷土研究会のメンバーの武井一郎さん(83)、安富一夫さん(83)に提供していただいた写真をご紹介します。今後もこの活動を継続し、寄せていただいた写真やものにまつわる記憶を本誌で報告していきます。

七五三の風景

昭和11年11月、仲町大神社で撮影。向かって左には、噴水のある池、右にはテニスコートや青年会館があった。この辺りはサクラの名所でもあった(武井一郎氏所蔵)。



現況 (2011.02.13)



三吉村立三吉尋常高等小学校同窓会

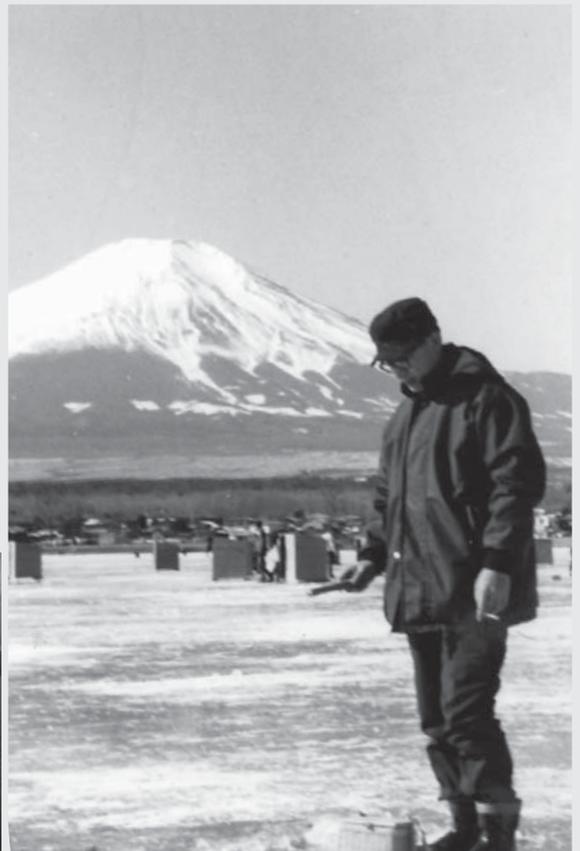
昭和19年(1944)1月2日に、昭和16年度卒業生で撮影。三吉村立三吉尋常高等小学校は、昭和16年(1941)4月に三吉村立三吉国民学校に改称。昭和17年(1942)以降、谷村町立谷村第二国民学校となる。校舎の脇を流れる戸沢川ではカジカガエルがよく鳴いていたそう(安富一夫氏所蔵)。



現況 (2011.02.13)

全面結氷の山中湖

昭和20年(1945)頃撮影。ワカサギ釣りのようす。氷の上を荷物を積んだ馬車が通った。仕掛けはすべて手作り。安富さんの記憶では20匹ほど釣り上げたという(安富一夫氏所蔵)。



現況 (2011.02.14)

ネコがいるバス

「大学の裏のほうにねこばすがあるんだって」。そう友人から聞いたのは去年の6月のころだった。「ねこばす」と呼ばれている存在がどこかにある。その正体不明の存在をつきとめたい。そう思い続けて半年。ついにねこばすに携わっている方がいるという情報入手。さっそく連絡をし、案内をしてもらうことに。果たして「ねこばす」の真相とは……？

前澤志依（国文学科1年）＝文・写真



ねこばすと出会う

1月29日。待ち合わせ場所に来てくださったのは、神奈川県横浜市にお住まいの櫻井幸恵さん（27）とご主人の洋輔さん（27）。個人的にブログでねこばすの情報発信をし、支援を募りつつ活動をしているという。

車で案内してもらうこと5分。都留市小野にある山を登り、中腹地点に行くといとけがない空き地に出た。そこに車を止める。ここが目的地のようだ。しかし、あるのは古びた廃バスが2台だけ。これがねこばす？ そう思っているとバス付近で4匹のネコを目撃。じつは、幸恵さんのお話によると、ここを見つめるまえ、廃バスは4台あったそうだが、そのうち2台の廃バスにはノネコ（山野にすむネコ）が住処としていたためか撤去せずに、そのままにしてあったらしい。なるほど、ネコがいるバスだから「ねこばす」。幸恵さんたちがバスを見つけたのは去年の春まえ。知人からこの場所を教えるもらったのがきっかけだという。「本当にバスのなかが悲惨な状況で……もともと毛布とか置いてあったみたいなんだけど、そこに染みついたネコ

の体臭や、糞尿の匂いがすぐくてね。むせかえっちゃって、そこには居られなかった」あんな状況は二度と見たくない、と幸恵さんはさらに付け足す。きつと、行く当てもないからとりあえずこのバスを拠点にして、生活をしているノネコが多くいるのかもしれない。

なかに足を踏み入れる。座席や窓はそのまま、アクセルを踏めば今にも発進しそうだ。不自由がない、広々とした空間。私がネコだったら、快適にすごせそうだなとバスのなかをぐるりと見回しながら思う。人里から離れたところにひっそりとバスがあるから、ノネコたちのびのびと生活をしている。まるで、ネコの秘密基地みたいな不思議な場所だ。

市役所の了承を得て、今は幸恵さんたちがおもにねこばすのノネコの面倒をみている。「今まではかわいいそうと思っていたけど、たけど、バスのなかで共食いされている子ネコをみつけて。衝撃的な状況があると知りながら、見て見ぬふりはできなかった」と幸恵さん。週2、3回洋輔さんの仕事がお休みのときに片道2時間かけて通い、エサやりとバスの掃除をする。通うのは大変ではないのかと尋ねると、「山中湖までよくドライブ



1. バスの外見
2. 運転席でくつろいでいるノネコ
3. 2台のバス
4. バスのなか。座席には寒さ対策で段ボールや毛布などが置かれている。ネコ用のトイレとエサ場のスペースもある

に来てたんで、横浜から都留は近く感じますね。でも、ネコの命がそこ（ねこぼす）にあるのに、体調が悪いから行けない、なんてこつちの都合で行けないっていうことはないようにしてます」とのこと。そして、これ以上ノネコを増やさないためにもねこぼすに住むノネコたちの不妊手術もしている。去年は5匹の子ネコを保護し、内3匹は今も幸恵さんたちが家で面倒をみながら、里親を探しているという。結果、以前は30匹以上いたノネコが、今は20匹ほどになったらしい。「ねこぼす」の背景には、人が

ネコにどうやってかわわってあげたいのかを考えている人がいる。そのことを想像していなかっただけで、始末が済んだら、都留に帰って来ようという理由でむやみにエサをあげ、保護をすればいいという問題でもないだろう。知らなかつた情報が私に飛び込んでくる。もしかしたら、都留でも糞尿などの被害で困っている人たちがいるのかもしれない。取材に行くまえはネコのことを深く考えたことがなかつた。大学周辺にもたくさんネコがいるが、ネコを見かけると「あ、ネコだ」と思うだけで、それ以上のことを考えたことがあまりない。

た。今いるねこぼすのノネコが寿命をむかえて、いなくなつたとき、今ある2台の廃バスも撤去してもらえないように市役所にお願したいと考えているらしい。これ以上バスにネコが住みつかないために、だ。

ねこぼすの存在

取材に行つたあと、私は、ネコのことについて今どのように考えられているのかが気になつて調べてみた。すると、2008年には27万頭のイヌ・ネコが殺処分になつたという（2011年2月16日朝日新聞より）。ノネコが集まり、糞尿の被害で周囲の人が困つてしまふという記事もネットで見つかり、仮に、かわいそうだからという理由でむやみにエサをあげ、保護をすればいいという問題でもないだろう。知らなかつた情報が私に飛び込んでくる。もしかしたら、都留でも糞尿などの被害で困っている人たちがいるのかもしれない。取材に行くまえはネコのことを深く考えたことがなかつた。大学周辺にもたくさんネコがいるが、ネコを見かけると「あ、ネコだ」と思うだけで、それ以上のことを考えたことがあまりない。

そんななか、ねこぼすと出会い、目で見て、体で感じた。そうすることで、今のノネコたちの現状の一部分を見ることができ、身近な問題のひとつとして考えている人が多くいることを知つた。今は私がネコとどうかわわってあげたいのかを考えてみても、なかなか答えが見つからない。でもねこぼすは私にとつて、身近な問題にもつと目を向けたいと思ふきっかけになつた。私が普段気にとめていない物事にたいして、これからどうすればいいのかと考えている人たちが多くいる。私自身は、それにもどう受け止めてあげたいのだろう。今回の取材をきっかけに、視野を広げながら身近なところではなにが起きているのかを、ゆつくりとじっくりと見て考えていこう。

最初は、正体を知りたい、という好奇心から「ねこぼす」を探し求めた。でも、ねこぼすはネコの秘密基地というだけでなく、じつは身近に生きるネコの問題を抱えた象徴として存在していたと私は思う。「身近な問題を見落としていないか」山の中にひっそりとあるバスは私にそう問いかけてきているようだった。

先生を訪ねる

第2回 自然塾の番長

先生をめぐる都留の旅。

今回の先生は、「玉の山ふれあいの里ネイチャーセンター」の学芸員である佐藤洋さん(36)。みずから「番長」と名乗り、ネイチャーセンターを訪れる人にいろいろな体験を通して自然とのふれあい方を伝えている。過去に何度か寄稿をしてくださるなど、本誌との関わりも深い。1月29日、佐藤さんが携わる活動の一つである「自然塾」に招いていただいた。

大澤かおり(社会学科2年) 文・写真

自転車を押しながら雪の残る長い坂道をおぼつていき、ようやくネイチャーセンターにたどり着く。大学から2時間ほどの道のりだった。時刻は午前9時。そこには、防寒着に身を包んだ子どもたちの姿が。送迎の車から飛び出した子どもがまず最初に駆け寄るのは佐藤さんのところだ。

「番長、おはよう」

子どもたちは口ぐちに挨拶をして佐藤さんを取り囲む。ちよつと強面の佐藤さん。けれどそれを意識させないほど、子どもたちに向ける笑顔は明るい。

この自然塾は、都留市の社会教育事業の一つで、市内の小学4年生から中学3年生を対象として、一年を通して自然のなかで体験をするというものだ。今年で13年目を迎えるが、いまだ人が途切れることはなく、定員を大幅に超える希望者が集まるという。

子どもたちは散りぢりになつて好きなことをやり始める。焚き火の周りにいる子や、山へ走つていく子。犬と遊ぶ子もいれば、遊具で遊ぶ子もいる。皆、てんでばらばらだ。佐藤さんに今日の予定を尋ねると「未定です」と力強く言われてしまった。一から十まで決められたなかで活動をおこなうのではつまら

ない、というのが自然塾を始めた当初からの佐藤さんの姿勢だ。これをやつてはいけない、というルールもこの自然塾にはない。

「外から見るとまとまりがないと思います。じつさい、ケンカもするしものも壊れるし、怪我もする。でも、そういつたときのリスク・マネジメントもきちんとするつていうのは徹底してます」

薪割り体験

午後になると薪割りをした。まずは佐藤さんが材木の1つを目の前に置いて、斧を振り下ろす。男の子たちは佐藤さんが軽々と材木を割つていくのを見て、我も我もと斧を手にとる。けれど、いくら斧を振り下ろしても佐藤さんのようには割れないのだ。私も挑戦してみたものの、材木の表面に傷が増えていくだけでなかなか上手くいかない。

「足を横に開いて、真上から力がかかるように振り下ろすんだよ」

佐藤さんの言葉を受けてできるかぎりその通りしてみる。斧が木目の間にすんと収まるように、きれいに割れた。これは気持ちいい。

そのうちに1人、2人とコツを掴んでいく。

子どもたちと向かい合う佐藤さん（写真中央の男性）



すると遠巻きに見ていた女の子たちも、薪割りの列に並ぶようになっていった。できないよ、と呟いていた子が自分の力で材木を2つにした瞬間の笑顔を見ると、「こちらまで「やった！」と叫びそうになる。1時間後には、斧を持つのも初めてだった子どもたちが器用に薪を割れるようになっていた。

「子どもはこういうの、すぐ覚えるよ。大人のほうがあだこうだつて言つて考えちゃつて上手くならない」

なかには、アカマツのように木目のねじれた木を上手く割るために、どこから斧を入れたらいいか、木目をじつと見つけて考え始める子もいた。何か一つできるようになることで、新しいたのしみ方が生まれるのかもしれない。

夜の山にて

冬至を過ぎてだんだんと日が長くなつてきている、と言つても、もう午後6時ごろには辺りは真つ暗になる。ナイトハイクが始まった。はぐれないように、2、3人で手をつなぎながら、坂道を歩いていく。途中で林に分け入つて、佐藤さんの指示で一人ひとり分かれて林のなかに寝転ぶことになった。私も少

し歩いた先の斜面で大の字になる。佐藤さんは「10分だけ何もしゃべらないように」と言つた。静かな夜の山のなかで、ただ何もせずじつとする。ふだんの生活ではなかなか体験しないことだ。暗闇に体を横たえて、子どもたちは何を感じているのだろう。

小屋に戻り薪ストーブを囲みながら、佐藤さんがナイトハイクの感想を尋ねる。「星がきれいだった」、「寒かった」。子どもたちの言葉に、佐藤さんは聞き入っている。ときに「いいね!」、「そうだよね」などと相槌あいつちをうちながら。

すべての活動を終えたのは午後7時。帰りに、佐藤さんに「お疲れ様でした」と言われて、ふとそんなに疲れてはいないな、と思つた。一日中動き回つていたせいで、体には疲れがたまつているのだろう。けれど、何故だか疲れたという気はしない。うきうきした気持ちだが、焚き火の燃えさしのようにまだ残っているようだった。

「番長」の頭のなか

「番長」というインパクトのある呼び名はどこから来たのだろうか。佐藤さんの思う「番長」のイメージをうかがつた。



「ガキ大将のイメージですね。安心感っていうか、自分を見守ってくれて、何かあったときには絶対的な力を発揮してくれるような」
 そのうえで、自然塾や佐藤さん自身は子どもたちを受け入れる存在でありたいと言う。

自然塾では佐藤さんが一方的に活動内容を決定することはない。学校とは違った学び方をしてほしい、というのが佐藤さんの願いだ。決められたプログラムのなかで動くのではなく、子どもたちがそのとき見ている方向を重視して活動をする。けれど、そういった学び方には時間がかかる。自然塾では通常の一年ごとの参加者の募集に加えて、二年目も継続して参加できる「15人枠」

を導入している。子どもたちが自分たちの力でやり遂げるためには、あえて黙っていないく

てはいけないときもある。「だいたい10のうち0から2くらいのことだけは教えよう。で、後は黙ってようって心がけてます」

こういったスタンスは、佐藤さんの子ども時代に

原点がある。佐藤さんの父親の教育方針は、「何でもやっていい、でも最後まで自分でやれ」。この考え方のなかで育っていくうちに、自分の力でやり遂げることの大切さが、佐藤さんの心に強く刻まれるようになったのではないだろうか。

いつも枠にはまらない自由な発想をする佐藤さん。夢はありますか？ と聞くと、自然塾から発展した形で寄宿舎を作ってみたいという。自分たちで生活しながら、毎日自然に触れて、ときにはケンカもして、経験と知恵を身につけていける場所。話を聞きながら想像してみる。自然塾でのにぎやかな雰囲気そのままに、子どもたちが大勢でご飯を食べたりお風呂に入ったりのだ。佐藤さんの頭のなかは、どうしたらもつと自分が、そして皆がたのしくなるか、というアイデアでいっぱいなのだ。

向き合うということ

自然塾には、引き込まれずにはいられない不思議な魅力がある。最初は取材という名目のはずだったのに、いつの間にか私自身が自然に触れて、驚き、考えて、笑う、参加者の一人になっていた。自然塾の居心地がよいの

は、自分の思いを肯定してくれる場所だからだと思う。自分のやりたいことをできる場所があつて、自分の感動に共感してくれる仲間や佐藤さんがいる。そのなかで培われる自信が、また新しいことへ挑戦する原動力になるのだろう。

佐藤さんは、私に子どもと向き合ううえで一つのかたちを示してくれた。私はこれまで小さい子どもに接するとき、心配する気持ちが強くなるあまり、子どものやりたいことを制限してしまっていたように感じる。けれど、一歩近づいて子どもの声に耳を傾けてみると、大人の立場だけでは見えなかったことに気づく。子どものなかにある「知りたい、やってみよう」という気持ち。それを引き出してあげること、子どもは大人が想像するよりもずっと大きく成長していくはずだ。

子どもと大人の関係ばかりでなく、立場や考えの違う人と接する機会は数多くある。人と向き合うことは、自分の目線を相手の目線に合わせることで、相手の見ている世界を推し量ることができれば、相手を尊重する気持ちが生まれてくる。佐藤さんと子どもたちとの関係は、私の人との関わり方を足元から見つめ直すきっかけになった。

おわりに，そしてこれから

わたしたちは自分の経験から学ぶ姿勢を大切にしながらこれまで『フィールド・ノート』を発行してきました。

現場に行ってみなければわからない音、感触、匂い。
自分の目でみて、耳できいて、歩いて、体験して、感じとる……。その経験を文章にすることは難しいことですが、そうすることで自分を見つめ、人や自然との関わりかたを学んでいます。

今回の原点という特集は、もう一度、『フィールド・ノート』が大切にしてきた姿勢について考えてみました。そうして、じっさいに経験することの大切さにあらためて気づき、文章を書くことで自分の経験をさらに深められるということを実感できました。

わたしたちは今回の特集で再確認したことを忘れずに、これからもみずからの経験から発見した驚きや楽しさ、経験を深めることを大切にしながら冊子をつくり続けていきたいと思えます。

谷村第一小学校「ようこそ先輩」



なんだか先生になった気分

1月25日、谷村第一小学校の「ようこそ先輩」という授業に参加しました。4年生の2クラス75名の前で、『フィールド・ノート』をつくるときの楽しさや、取材をするときの注意点について話しました。

小学生たちは、とてもきらきらした目で真剣に私たちの話を聞いてくれたので、話すのが本当に楽しかったです。取材して楽しかったことは何かや、取材から帰ってきてまず何をするのか、そして次にやりたいことは何かといった質問をもらいました。小学生からの質問はとても率直だと感じました。

(尾崎万奈)

駅の展示替え

2月9日に都留文科大学前駅の待合室の展示替えをおこないました。今回の展示の主役はリス。写真とともにクルミの食痕などが展示されています。このほかに、『フィールド・ノート』の特集記事や都留の動植物を紹介するパネルなど、都留の自然を生きいきとお伝えする内容になっています。

『フィールド・ノート』のバックナンバーも見る事ができるほか、自然や動物に関する本もたくさん置いてあるので、まるで小さな森の図書館のようです。

駅舎に立ち寄ったときは、ぜひ待合室の展示をご覧ください。

(志村夏樹)



力を合わせてよい展示にする



鳥が好き カワガラスの冬



ちょっと背伸びをするカワガラス。ピンと張ったしっぽが愛くるしい



石の上にとまるカワガラス。名前にはカラスとついているがカラスの仲間ではない

最近、^{ひしやくながしがわ}柄杓流川沿いでカワガラスを観ています。カワガラスは2月頃から繁殖をはじめのようです。

2月8日は、川の飛び石につがいととまっていた。石の上にちょこんととり、羽毛をふくらませて毛繕いをする姿は、まるまるとしていてとてもかわいらしいです。いっぽう、カワガラスは、その愛らしい立ち姿からは想像もできない速さで飛びます。それはまるで弾丸のようがかっこいいです。ピャッピャッと鳴きながら、水面ぎりぎりを低く飛びます。あの低空飛行でいったいどのようにして加速しているのだろう。あっ飛んだと思ったら、次の瞬間にはもう遠くへ行ってしまうています。

滝のそばを流る川をのぼり降りていくと、人の気配を感じたカワガラスが川に出てきています。そのため、滝のなかにいるカワガラスを観たことがありません。いったいカワガラスは滝のそばで何をやっているのだろうか、その不思議な生態に興味津々なのです。

(尾崎万奈)

2011.1-2

Field Note News



フィールド・ノート編集部=文・写真
尾崎万奈（比較文化学科4年）=イラスト

まゆだんごづくり

1月12日に訪れたのは、十日市場にある^{わたなべ}渡邊さとゑさん(79)のお宅。十日市場でおこなわれる「どんど焼き」に使う「まゆだんご」づくりを手伝わせていただきました。

原料は至ってシンプル。米粉に上新粉、そしてお湯。さとゑさんが子どものころ水でだんごをつくってみたら、蒸したときに崩れてしまったそう。

私たちの作業は、さとゑさんがしっとりするまでこねた生地を、ピンポン球より一回り小さく丸めていくことでした。赤と白合わせておよそ300個近くのだんごを約2時間かけてつくりました。つくり終えただんごは、お汁粉や黄粉などで味付けしておいしくいただきました。
(崎田史浩)



上：粉類にお湯をそそぎ、力いっぱいこねる
左：蒸しあがったまゆだんご

中屋敷フィールド・冬作業

1月20日、快晴の日に、中屋敷フィールドで3つの作業をおこないました。

まずは麦踏み。麦を太く、実りを良くするための作業です。昨年の11月に蒔いた麦は5cmほどに生長していました。例年に比べると麦の密度が低く、連作により土地がやせてきているのではないかと感じました。

次にウメの手入れ。枝に巻き付いたツルを取り、枝を剪定していきます。昨年は雪の影響でウメの実をほとんど収穫できなかったため、今年の収穫と春先の天候を祈り、ていねいに作業します。

最後の草刈りは、40分ほど。刈っている最中、ススキの株のなかにカヤネズミの古巣を見つけました。直径10～12cmほどの球形の巣が5つ。精巧なつくりに関心するあまり、作業する手が止まってしまいました。
(西丸堯宏)



歩いているように見えますが、麦踏みをしている最中です



カヤネズミの古巣

FIELD NOTE

no.68 Mar.

発行人

北垣憲仁 [6-9,36-37]

統括編集者

西教生 [6-9,22-23]

編集長

石川あすか [2-3,28-29]

副編集長

北村彩乃 [4-5,16-17,43]

香西恵 [4-5,24-27,46]

編集

桜井明子 [36-37]

狩野慶 [20-21]

尾崎万奈 [44-45]

千葉真希 [30-31]

西丸亮宏 [6-9,18-19,22-23,36-37]

市太佐知 [46-47]

岩下瑞枝 [46]

大澤かおり [40-42,46]

崎田史浩 [1,10-13,48]

寺元静香 [34-35]

藤森美紀 [43,46]

持田睦乃 [32-33]

牛丸景太 [14-15]

前澤志依 [38-39]

ロゴデザイン

工藤真純

FIELD・NOTE (フィールド・ノート)

発行日：2011年3月18日

発行部数：400部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

○お詫びと訂正

前号(67号)の6頁および8頁において、橋村さんの住所の表記に間違いがありました。朝日馬場としていましたが、正しくは盛里です。ここに記してお詫び申し上げます。

編集後記

テーマ「春を感じた、冬のひとコマ」



はだにしみる寒さに耐えきれず、しのげる場所はないか常に探しています。ある日、学生食堂の窓際の席に座ると、暖房とは違う暖かさが。何だろう、と考えて、雲のない空に浮かぶ太陽に気づきました。風などに邪魔されず、純粋に太陽が与えてくれる温度は、暖かいのを通り越して少し暑く感じるほど。太陽ってこんなに暖かいものだったっけ？ 久しく体験していなかったぬくもりに、その席を離れがたくなってしまいました。(大澤かおり)

じんじんってことばがあるけれど、都留の冬は外にいただけで手足がじんじんしてきます。寒がりにはほんとに辛い季節です。でも、こんな時期だからこそ、太陽が照らす日なたに入ると、その温かさを心からありがたいと思えるのです。ひなたぼっこするにはまだ早いけど、花も草もこの温かさのおかげで芽を出すのだと思うと、ほんとうに温かい光ですね。(岩下瑞枝)

めを足元にむけると、日のあたる地面にへばりつくように、植物があおあおとした葉をめいっばい広げているのに気がつきます。先日、そのなかにホトケノザのピンク色の花を見つけました。花の部分を取ると、花があったところに仏さまが座りになるそうです。ちいさな座布団の上にちいさな仏さまが座っているようすを思い浮かべると、何だかゆかかったです。(香西恵)

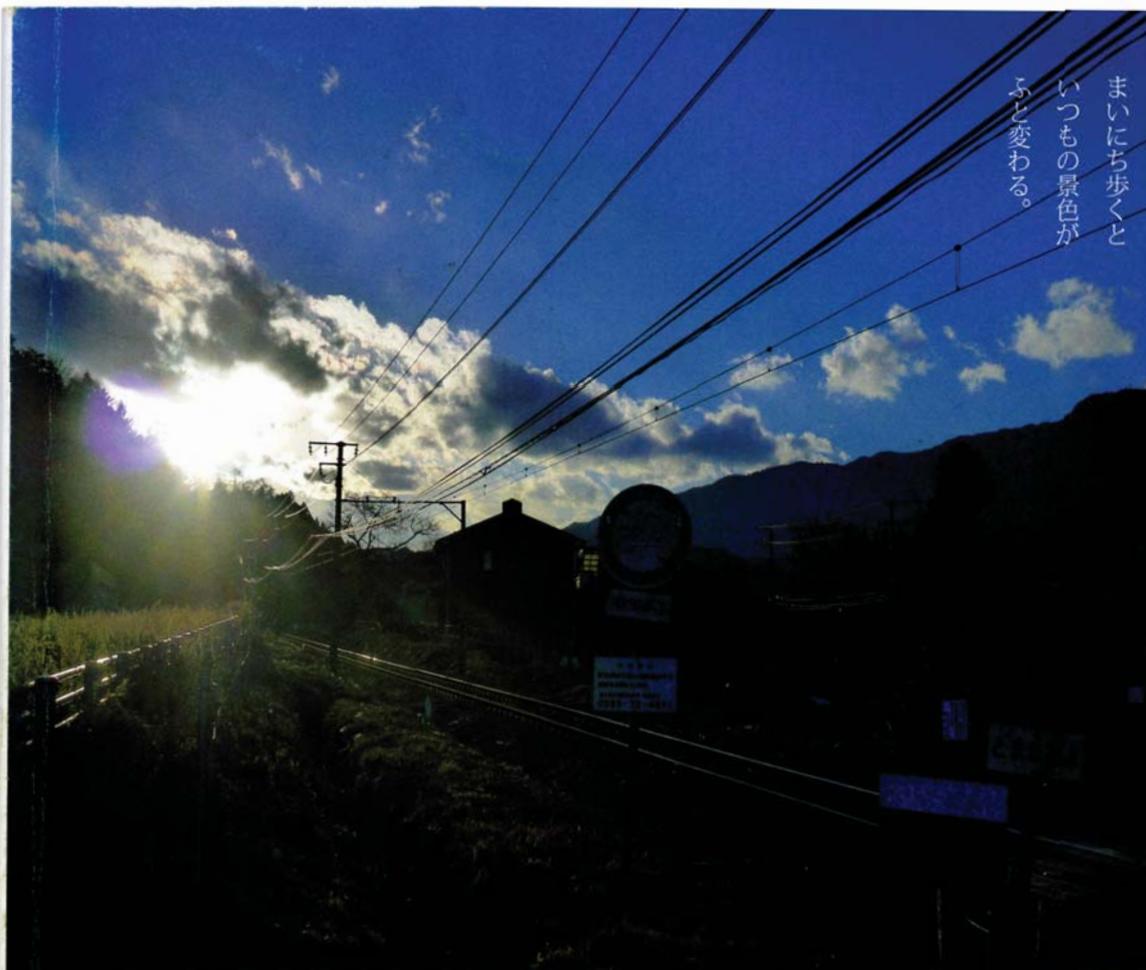
るーれつとの上の玉のように、くるくるまわる毎日をせかせか過ごしているなかで、ふと気がついたこと。ほんの少しだけ日が長くなったような。まだまだ寒いけれど着々と春が近づいて来ているのだなあとぬくぬくした部屋で外を眺めつつ思う、今日この頃。(藤森美紀)

次回予告

春を感じる(仮)

フィールド・ノート 69号
5月末発行予定

撮影 石川あすか



まいにち歩くと
いつもの景色が
ふと変わる。

FIELD·NOTE no.68

発行日 2011年3月18日(年4回発行)
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』 編集部

